
the prism

七篠名無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

the prism

【Nコード】

N6892Y

【作者名】

七篠名無

【あらすじ】

私立巴咲とちえなき高校に通う御咲麗一みさきれいちは、勉学に励む優等生。ただの学生であつた彼の運命は、ある少女の手によって壊される。巨大な起動兵器が地球を制圧するだろうと断言する、自宅の前に倒れていた少女、カノン。そして、それを食い止めるために用意された起動兵器『アヴソリユート』に乗って戦う運命を強いられる麗一。壊された日常から紡がれる新たな物語とは？

文章が乱れていたり、誤植があつたり、分かる人にしか

分からないマニアックなネタも混ぜていますが、どうか温かい目で見守って下さい。

by 七篠名無

プロローグ

私は、一体どうすれば良いのだろうか？

そう、意味も無く自分に問いかける。

勿論、答えなど返って来る筈も無い。

そんな事は最初から解かっていたが、つい、想ってしまう。

本当に、意味など無いのに。

私は今、自分にとって大きな決断を仲間から迫られている。

本来は悩む必要など無い。

返す答えは、もう決まっている筈だった。

しかし、本当にいいのであろうか？

これを行えば、取り返しの付かない事になるだろう。そうならば、

私はただの犯罪者になってしまう。

大きな罪悪感が重くのしかかる。

そもそもの話、私はこの案に乗り気では無かったのだ。

そして、口火を切った当の本人は、もう、いない。

この計画の最高責任者は私となり、大きな使命感を心に感じながら、

今までの道程を耐えてきた。

もう、後には引けない。共に歩んだ仲間たちに一声かけるだけ。そ

れでいい筈なのだ。

しかし、私の理性がそれを拒む。

私は、平和を望んだ。今も切にそれを望んでいる。

しかし、それでは、私がやってきた事とは何だったのだろうか。

どうしてこんな計画を進めてしまったのだろうか。

なぜやっていった事に何の疑問も感じなかったのだろうか。

.....。

「どうしたのか……」

色々な考えが脳を飛び交い、これ以上脳内で考え続けるのは疲れてしまったのか、座り込んでいた男の口からは、自然と言葉が出ていた。そのまま口は、小声ながらも延々と喋り続ける。

そんな彼は、影からずつとこちらを見ていた小さい人影にも気付く事は無かった。

「……………」

小さい影は、動いた。

1

地球。

太陽系の惑星で唯一の、生命体が生まれた星である。

その星の中の1つの小さな国、日本。

その国では、今、まさに太陽が昇っている。

太陽の眩しい光は、日本の領空を満たし、領海を温め、領土を照らし出す。

つまり、朝だ。

その朝日に照らされた、一つの街、虹乃町。にじのまち

その町の一角にある、一つの家。その中に住む住人は、今日も日常に身を投ずる運命にあった。

「……………ふわあああ……………」

まだ眠そうに欠伸をする、背の高い少年は、ベッドの横に置いてある目覚まし時計に目を移した。

「……………6時か……………」

少年みゆきれいじ——御咲麗一はそう呟くと、今日もいつも通りだ。などと思いつつ目覚まし時計の鳴ってもいないアラームの機能を切った。ここ最近、寒い訳も無く、熱くも無い。何とも言えない中途半端な日が続いていた。

麗一は、まだ名残惜しそうなベッドから出て、彼は顔を洗いに洗面

台へと立つ。

毎朝、鏡を通して鉢合わせる自分の洗い立ての顔を、麗一は改めて見る。

完璧なる童顔が、そこにあった。

それをみて、麗一は一種の情けない気持ちになってしまふ。男として生を受けた筈なのに、こんな女々しい顔なんて……。麗一はそう思ってしまうのだ。

はあ、と、麗一は溜息をついた後、学校の制服に着替えた。そして、家のゴミを持って外へ出る。

ゴミを集積所まで持っていくと、麗一は自宅に戻らずに、家の向こう側にある洋菓子店の裏口へと入っていく。

何も知らない人に、今の麗一の行動を見せたら、彼は何をしているんだろう？と思うだろうが、これは彼にとっての忙しい朝の情景だ。

彼、御咲麗一の両親は、彼が2歳ぐらいの頃、既に亡くなってしまっていて、両親と仲の良かった一家に引き取られた。

だが、その引き取った家も最初から父親がおらず、母親も引き取られて3年もしないうちに亡くなってしまった。そして彼の親権は、この一家の長女に引き継がれたのであった。

そしてこの洋菓子店『rainbow』は、彼の保護者代理人が現在住んでいる家である。そして彼は、その保護者代理人の所に朝食と、昼食の弁当を作りに行ったのだ。

「……おはよう。お邪魔しますよ」

麗一は、対等の相手に使う言葉と敬語を織り交ぜた妙な言葉を発しながら、『rainbow』の裏口へと入る。

家の中は静まり返っていた。つまり、この家の住人はまだ寝ているのだ。

麗一は、帰って来ない返事には慣れている。玄関で靴を脱ぎ、家へと上がる。

玄関のすぐ前にあるドアを、麗一は勢い良く開いた。

「……やっぱりね」

麗一は苦笑いを浮かべた。

リビングへと通ずるドアを開けた先にあつたのは、大テーブルに突っ伏して寝ている、ロングヘアの女性だった。腰にまで届いているその長い栗色の髪が、目移りしそうな程麗しい。

この女性が、御咲麗一の保護者代理人であり、この洋菓子店『rainbow』の店長、逢坂優歌である。

「姉さん……またこんな体勢で寝てる……」

麗一は、優歌の事を「姉さん」と呼ぶ。なぜなら、「お義母さん」と呼ぶには彼女は若すぎるからだ。それに、結婚もしていない。

だが、他にも理由はある。

「起きて下さい。姉さん？起きて下さいよ……もう」

呼びかけても、揺すっても反応無し。全く起きる気配を見せない。

「……もう、だらしがないんだから」

こんなだらしのない人を「お義母さん」なんて呼べない。これがもう一つの理由だ。結婚できないのも、この事が手伝っているからである。

現在、28歳。そろそろ結婚しないと婚期を逃してしまう。

早く幸せになってもraitたいな。と思いつつ、麗一は彼女を揺すり続ける。

「……んん……」

「やっと起きましたか……」

麗一は嘆息する。

「……うにゅ……?」

寝ぼけ眼の優歌。いまだ未覚醒のためか、奇天烈な発言をする。

「おはよう、姉さん。朝ですよ」

「……にゃむっ」

「寝ないで下さい……」

睡魔の猛攻に屈させてなるものか、と思いつつ麗一はそれでも取

り乱さずに優歌に呼びかける。

「……………むう……………麗ちゃん……………あと5分だけ……………」

「ダメですよ、早く起きて下さい」

「……………はい……………」

こんな会話もいつもの事だ。麗一は、寝ぼけ眼で足取りもおぼつかない優歌を、洗面所へ連行、顔を洗わせた。

「もう、1人でやって下さいよ……………」

ばしゃばしゃと音を立てて顔を洗う優歌に、麗一は呆れ顔で呟いた。

「……………んんん……………よし！お姉さん、目が覚めちゃいました〜！」

「顔を拭いて下さい、姉さん」

背伸びをした後、覚醒を宣言した優歌に、麗一がにべもなく言う。

「はいはい、分かっていますって」と言っつて、優歌は顔を拭いた。

「それで麗ちゃん、ご飯の方は？」

「残念ですが、まだできていません」

「うええ！？お腹すいちゃったよ……………」

そう言っつと、優歌は床にへたりと座り込む。

「立っつて下さいよ……………ご飯ができたら呼びますから、その間は着替えでもしてっついて、待っつてっついて下さい」

「はい。なるべく早くね」

恋歌は、どきりとするような笑みを浮かべると、颯爽と2階へ上がっつて行っつた。

優歌のパティシエとしての腕もだが、彼女のこの笑顔も手伝っつてのおかげか、この洋菓子店は繁盛してっついる。

姉さんの笑顔には、人を魅了する何かがあるんだらうな。と思っついつつ麗一は朝食を作るためにリビングの調理場へと戻っつた。

この家の朝食は和食だと決まっつている。

味噌汁とおかずを何品か作り、炊けたご飯を盛っつてしまえばもう準備は出来てしまっつう。

朝食を作り終え、自分の昼食である弁当の具材を作り始める麗一。鼻歌交じりに慣れた手付きで、彼はあっという間に具材を作り終えると、その具材を弁当箱へ詰めにかかる。

その作業もあっという間に終わり、休憩の意味も含めて、彼は冷蔵庫から冷えたお茶のボトルを取り出し、コップに注ぐ。

コップを満たした緑色の液体を、麗一は飲み下す。

麗一は緑茶が好きだ。なんと言うか、心が落ち着くのだ。

一休憩を終えた麗一は、次の仕事に取り掛かる。

次の仕事とは、『優歌の妹を起こす』事である。

二階に上がるとそこにあるドア。

そこには、『ゆうかちゃんのおへや』と、可愛らしい平仮名で書かれているプレートがぶら下がっている。ここが保護者代理人である、優歌の部屋だ。

その向かい側にある、もう一つの部屋。

そこには、優歌の部屋のドアに掛かっているプレートと同じものが掛かっていて、そこにやはり可愛い平仮名で、『れんかちゃんのおへや』と書かれている。

プレートに書かれている『れんかちゃん』とは、優歌の妹である、あいさかれんか逢坂恋歌の事である。

恋歌は、麗一と同じ年齢で、麗一とはかなり長い付き合いとなる。学校も同じなので大体いつも一緒にいるが、それが元で高校入学当初は、クラスメイトからかなりからかわれた。

そのせいなのか、以前と比べると随分と素直じゃなくなってしまい、取っ付きにくくなってしまった。高校の女子の中では綺麗な方なのに、非常に残念である。

まあ、元は素直だったのか、と言われると、そういう訳でも無いんだが。

「ふう……。よし」

意気込んで、恋歌の部屋のドアノブに手を掛ける。

なぜ意気込まなきゃならんだ、と、誰かが見れば思うだろうが、

ドアを開ければ理由は直ぐに分かる。

「……………」

ドアを開けた麗一の目の前に飛び込んできたのは、毛布を床にぶちまけ、腹を出した状態で熟睡している恋歌の姿だった。

「こりゃあ酷いな……………」

何年も同居同前の状態で、既に見慣れた光景になってしまっている筈の麗一の口からも率直な感想が飛び出す始末だ。

しかしいつまでも呆けている暇は無い。一刻も早く麗一は彼女を起こしにかかる。

なぜなら麗一は、遅刻は1回もした事が無い生徒に贈られる、学校の皆勤賞の有力候補だからだ。こんな事で、皆勤賞がふいになっては困るのだ。

「恋歌、起きて」

「……………」

「恋歌、起きてよ」

ゆさゆさと身体を揺るも効果が無い。

この家は二人揃って良く寝るなあ。と麗一は思いつつ、肩を揺すりながら呼びかけ続ける。

もし僕がいなかったらこの2人は一体どうなってしまうのだろうか……………」

そんな事を考えるくらいの時間、肩を揺すり続けていると、

「んんん……………何よお……………」

恋歌が目を覚ましたようだ。

「はあ、やっと起きたよ……………」

「んん……………誰？麗一……………」

「そっだよ」

「……………何やってんの？」

「起こしに来たんだよ……………」

朝で頭がまだ冴えきっていないからか、恋歌が大ボケをかます。

僕が起こしに来るなんて、いつもの事だろうに……………。そんな問答も

麗一にとってはいつもの事だ。

「恋歌、ご飯できてるから、早く降りてきてね」

「分かってるわよ……。何年こうして来たと思ってんの？」

「はいはい、悪かった悪かった」

「何よ、その言い方……」

「いいから早く降りてきてね」

「分かってるわよ！」

おお怖い。こうなった時の恋歌には構わない方が良さ。次、何か言おうものなら、今度は鉄拳が飛んでくる。拳で語り合つのは遠慮したい。どうせ一方的に語り込まれるだけだ。

麗一は急いで下のリビングへと戻って行った。

食事を終え、麗一と恋歌は学校へ赴く。

今日は見事な晴天だ。念の為にカバンの中にはいつも折り畳み傘を入れてはいるが、今日は使う必要は無さそうに思えた。二人の後ろから聞こえる、優歌の「いつてらっしゃーい」が、妙に心地よく聞こえた。

彼らの向う場所は、『私立しりつ巴咲はさき高等学校』である。

私立にしては珍しい、低額費で入学できる高校であって、学力もそこそこのので、毎年かなりの人数が応募し、倍率は2倍を下回る事は無いと言っている所だ。

麗一たちは、そんな狭き門を潜り抜けたのだが、中学3年の時点で巴咲高校に合格できる学力があったのは麗一だけだった。

麗一はもっとレベルの高い学校にも行ける学力はあったのだが、恋歌が頑張れば合格できそう、かつ自分が授業で退屈しなさそうな様な高校のレベルまで志望校を下げて、それに合格できるような学力を付けさせるため、麗一は中学校生活最後の1年弱の期間、熱心に勉強を教え込んだのだ。

その麗一の努力は報われ、見事、巴咲高校に合格する事ができた。今思い返すと、僕、頑張ったな……。

などと考えながら歩いていたら、恋歌が話しかけてきた。

「ねえ、麗一。今日のお弁当は何？」

「それは、開けてからのお楽しみだよ」

麗一は恋歌の質問に、少し意地悪な返答を試みた。

「えええええ！？イジワルウ……」

すると案の定、頬を膨らませて恋歌が麗一の態度に抗議の意思を示す。恋歌は表情豊かで、始めて彼女を見る人でも、彼女の印象は強く残るだろう。

話しているとその表情がくるくると変わるので、麗一は色々な言葉を言つて、彼女に感情の起伏を発生させるのだ。そんな色とりどりの顔を見るのが、麗一の登校中のささやかなイベントとなっている。そして、そのイベントには、参加者がもう一人いる。

「おやおやおやあ？これはこれは、麗一殿と恋歌様ではありませんか？」

どこからともなく現れた、麗一や恋歌と同じ制服を着ている、麗一よりも一回り大きい背格好の青年。ぼさつとした前髪を上に乗せたその顔は、いかにも気怠そうな表情をしているがそれ以上の詮索ができない、独特の表情を取り繕っている。

「あ、おはよう、有無ゆむ」

これに対して麗一は、何事も無かったかのようにさらりと挨拶を言う。恋歌はと言つと「おはよ。また朝から怠そうな顔してるわね」と、柀の葉を添えた挨拶を投げつける。

この扱いに、有無と呼ばれたその青年は、「あつさり返すなよ、つまんねえ……」などと、後ろ髪を掻きつつ愚痴を零した。

この青年ななしのせいせいのせい——七篠有無は、麗一のクラスメイトだ。

少し引つ込み思案な麗一にとっては、話し掛け易いがために親友の仲である。

有無は恋歌とも直ぐに打ち解けて、いつの間にか仲良し組のような関係になっていた。

そして3人は現在2年生になるのだが、なんとこの3人はまたし

ても同じクラスなのだ。偶然の産物か、はたまた腐れ縁の始まりか、それは麗一たちには分からないが。

今では、神出鬼没の有無が2人の前にいつの間にか現れている。そんな登校風景も日常と化してしまっていた。

「それにしても、有無はいきなり現れるわよね。どうやってやってんの？超能力？」

「超能力？そんなモンあったら、もっと有意義に使ってるさ。ただ単に俺は神出鬼没なんだよ」

「それって自分で言っちゃ意味無いんじゃないかな？」

「こまけえこたあいなんだよ。あゝ、それにしても、ダリーなあ…

…」

なんていう何気ない会話を交わしているうちに、気付けば巴咲高校に着いている。

「……お、もう学校か。早いな」

有無がポツリと言った。

「話していると、時間が経つのが早く感じる事ってあるよねえ……」

「でも、現在時刻はちよつとキツいかもよ？急いだ方がいいんじゃない？」

「「え？」」

恋歌の言ったことに反するかのような意見を掲示した麗一に、2人から疑問——否、確認の意味を含めた声上がる。

恋歌と有無は、別段、息を合わせている訳では無いのに、ほぼ同じタイミングで校舎に備え付けられている時計を見た。その時計の指し示す時刻は、8時26分。あと4分で予鈴が鳴る。

「……急ぐぞ！走るぜ、麗一！」

「え？あ、うん！」

「ちよ、ちよおつとお！！あんたら待ちなさあい！！」

3人は慌ただしく校舎の中へと入って行った。

学生が、自分たちのクラスへ入っていく。

そんな当たり前の光景が目の前で流れていく。

麗一たちも、その光景に投影される日常の1ピースだ。流れに習って、自分たちのクラスへと急ぐ。

「はあ、やつと着いた……」

麗一は自分の席に座ると同時に、溜息を1つ吐き出した。

巴咲高校の2年1組の教室は、4階にある。

普通の高校生ならおよそ経験したことのないであろう朝の仕事を終え、ここまで歩き、4階まで上がるのがどれ程の労働か、麗一は日頃から理解していた。

机に突っ伏して、少しでも体力の減少を抑えようとする麗一。

その後ろに、麗一に近づこうとする1人の女生徒の姿があった。

背は恋歌よりも2回りほど小さく、整った顔立ちと綺麗にそろっている前髪。歩く姿も様になっており、世に言う『良い所』の育ちである事が伺える。というか、彼女の場合は実際に良い所で育っている。

その娘は、しゃなりしゃなりと麗一の横まで移動すると、声を絞り出すようにして、麗一に話しかけた。

「み、御咲君、おはようございます……」

「ん……あ、式園シクヰンさん、おはよう」

麗一に返事を返されたその娘シクヰン——式園瑠璃は、気恥ずかしそうに頬を赤らめる。

「あ……えっと、あの……その……」

瑠璃はパクパクと口を動かすが、会話が繋がらない。

「……えっと、どうしたの？」

「い、いえ、何でもありません……何でもありません……」

瑠璃は、またも恥じらうように俯く。

「……大丈夫？体調が悪いの？」

「へ？い、いや、そんな事は……」

口ではそう言うものの、顔は耳まで真っ赤だ。熱でもあるんだろ

うか。

麗一はそう思い、立ち上がって瑠璃の額に手を当てた。

「ひゃっ？」

手が触れた途端、瑠璃はびくつと身体を震わせると、後ろに飛び退いて縮こまってしまった。

「え！？あゝ……えっと、ゴメンね。今僕、何か変な事したかな……？」

「い、いえ……違います……」

麗一の問いに、瑠璃は縮こまったまま答えた。

2人の間に、微妙な空気が流れる。

「あゝ……えゝつと、もういいかな……？」

先に口を開いたのは麗一だった。

「は、はい……すみません、お足を止めさせてしまいました……」

「いや、そんな事は……」

上品な謝罪の言葉を言った後「はあ……」と、これまた上品な溜息を漏らして自分の席へ帰っていく瑠璃。

その残念そうな横顔を見て、麗一は首を捻った。

自分は何か、変な事をしただろうか？

答えは出て来ない。

彼女の事だから、僕らみたいな中流社会の住民には分からない気苦労とかがあるんだな。と、麗一はこの事についての自己完結をして構想を終了する。その途端、教室のドアががらがらと音を立てて開いた。

「おはよー！ホームルーム始めるから、席について下さーい！」

ドアから出てきたのは、とても背の低い女性だった。だが、その手には出席簿が握られている。つまり、教師なのだ。

この教師が麗一たちのクラスを受け持つ教師、城咲穹^{きびきり}である。ちなみに、担当教科は保健である。

学生に様な容姿とは裏腹、雄々しい名前の持ち主のため、名前だけでは男性と間違われ、容姿では学生と間違われる。それが彼女の

悩みらしい。

丁寧にドアを閉めた穹は、そのまま教卓の前へ

ズデッ！

「いったあ！」

……段差で転んだ。

「穹センセ、相変わらずっすね」

大きな声で有無が言う。案の定、クラスは笑いに包まれた。

「ううう……笑わないで下さい！」

穹は顔を真っ赤にし、手を振り上げて反論する。

そんな子供っぽい仕草が、容姿に次いで彼女を人気にしている理由の1つである。

加えて言うならば、クラスを騒がしくする要因の一つでもある。

「皆、静かにしてあげようよ……」

「そ、そうよ！皆静かにッ！」

麗一が少し声を張って言う。それに恋歌も呼応して、教室は何とか静けさを取り戻した。

「御咲君、逢坂さん、ありがとうね……」

穹は、若干目に光る物を湛えながら2人に礼を言って、出欠を取り始めた。

……この人、教師として大丈夫なんだろうか。

そんな無粋な疑問は答えが当たり前前すぎて、あえてそれ以上は考えなかった。

麗一は何も言う事無く、穹の話す伝達事項に耳を傾けた。

巴咲高校は、学力はそこそこあるため、それ相当の授業はする。

現に、授業中はクラスメイトは終始無言でノートにペンを走らせている。

しかし、麗一にとっては『この程度』の授業でしかない。もちろん

授業自体はきちんと真面目に受けるのだが、麗一のレベルともなれば退屈に感じてしまうのだ。

早く終わらないかな……。

麗一が黒板の内容をノートに書き写し終えてから、既に4分程だ。

授業の内容の説明は全て終わり、先生の雑談が始まっている。

こんなくだらない話を聞いている暇があったら、早く次の授業を受けたい。と麗一は思うのである。

と言っても、この授業が終われば、昼休みで、朝食の時間だ。授業は30分程おあずけとなる。勉強熱心な麗一でも、昼休みは楽しみなのだ。

その昼休みに食べる弁当には、恋歌の好きな揚げ物、エビフライが入っている。恋歌、どんな反応するかなあ……。麗一は回想に耽る。

そんな事を考えるうちに、授業の終了を告げるチャイムが鳴り響く。

授業が終わり教師が号令をかけさせると、教室内は一気に騒がしくなる。

麗一は、このざわざわしている空間が嫌いなのだ。そのため授業が終わったら、恋歌と有無、そして、時々瑠璃も連れて、麗一たちはいつも昼食を摂っている、ある場所へと向かう事になっている。

「麗一、おつかれ」

今日、先に来たのは、恋歌の方だった。

「今日のお弁当、頂戴！」

「はいはい、ちょっと待ってね……」

麗一は、言われた通りに自分のバッグから、2つ弁当箱を取り出し、片方を恋歌に渡す。

その時丁度、有無がやってきた。

「うす、麗一。おおつとお！？また愛妻弁当（？）か。恋歌ア、いい旦那さんを持ったな……。ぐへえっ！！」

有無が台詞を言い終えるか否かという所で、恋歌が有無の顎に強

力な一撃を叩き込む。しかも脚で、だ。

確か恋歌は、武術等は何も習っていない筈だ。どこでこんな危険な体術を身に付けたのだろう。麗一は毎度の事ながら首を傾げる。

「ああもうつ、あんたはうるさいのツ！そこで黙ってなさい！もう……。ほら麗一、さっさと行きましょ。」

「あ、うん。そうだね。早く行こうか。」

不機嫌な恋歌に口答えすると、どうなるか分からない。少なくとも殴られるのは目に見えている。麗一は歩を進めようとした。その時、瑠璃が麗一のもとに近寄ってくる。

「……あの、御咲君……」

話しかけた瑠璃は、もじもじとしながら、こう続けた。

「昼食、ご一緒してもよろしいですか？」

「あ、うん。もちろん」

「そうですね……良かったです」

麗一の肯定に瑠璃は心底嬉しそうに笑うと、麗一の横に並んで、麗一の制服の裾をふわっと掴んだ。それに、恋歌がくっつかかる。

「ああーっ！何引っ付いてんのよ麗一！」

「え？いや、今は僕がやったわけじゃなくて、式園さんが……」

「どっちも同じよ！いいから離れなさい、恥ずかしくないの!？」

「いや、僕は別に……」

どこかしら不穏な空気が漂う。周りもざわざわと色めき立って、何かしら囁く声が聞こえる。

『またあいつらか……全く、毎回毎回騒々しいな』

『いちやいちやしゃがって……麗一の奴め、うらやま……いや、けしからんな』

『いったい式園さんと恋歌ちゃん、どっちを選ぶんだらうね、麗一君は』

これが世に言う「修羅場」とか言う奴なんだろうか。それにして

は、ちょっと生易しいような……では、この状態を何と言うんだらうか？

「この状態をな、『婿の取り合い』って言うんだぜ、麗一くん」
いつの間にやら復活していた有無が、麗一に言う。

「へ？……ムコの、取り合い？」

「そうそう、一体、この戦に勝つのは誰なのか、全ては麗一、お前次第だ」

「え、え〜っと、有無、その話さ、もしかして2人が僕に気があるのを前提で話してないかい？」

「ええ〜！？麗一くん、今の台詞、本気で仰ってますウ？」

「だって、そうでしょ。まさか僕みたいなのに2人も女の子が、ねえ……冗談キツイよ、有無」

「……人一倍の鈍感やな……」

「え？いや、そんな事は無いと思うけど……」

「いやいや、麗一君、いいから聞きたまえ。君は自分を過小評価する傾向がある。が、それはダメだ。改善すべき1つのポイントだ。

……加えて言うならば周りに敏感になれ。もっと自己主張を持って生きて行かないと、女の子は素直にはならな……」

ここまで言つて、何かの気配を感じたのか、有無が振り向く。

「……お前は、何を言ってるんだ？」

ギギギギ、と首を後ろへと向けた先には、脳天から鬼のような角をメキメキと生やした恋歌の姿があった。少なくとも、彼にはそう見えた。

「……あ、あははは、恋歌さん、こんにち……」

「いっぺん死んでこおい！！」

何か言い訳をしようとした有無に、恋歌の見事なアップパーが炸裂し後ろへ吹っ飛んだ。この格闘家顔負けの戦闘技術に、そこかしこから賞賛の拍手が沸き起こる。

その拍手の対象の恋歌は、廊下にまで吹き飛ばされてぐったりとしている有無に、びしっと人差し指を突き立て、言う。

「あんたはそこでちょっと頭を冷やしなさい！麗一に変な事を吹き込まないで！……ほら、行きましょ」

「へ？あ、うん……行くうか。式園さん、行きますよ」

「あ……はい」

「おおいおい、待ってって、置いてくな」

「復活早ッ！」

律儀にも麗一がツツコミを入れる。

「まだ起きれるんなら、今度はキヤメルクラッチでもどつ？」

「もう絶対言わないんで許して下さいお願いします」

「物騒だなあ」

まるでコントの様な会話をしながら、4人組は『秘密の食事場所』を目指した。

巴咲高校の屋上。

その屋上で、男女が2人ずつ、計4人が賑やかに食事を摂っている。

そう、『秘密の食事場所』とは、屋上の事だ。

だが、巴咲高校は、屋上を生徒に解放している訳では無い。

つまり、校則違反だ。

「……………」

まるで居場所が悪い。と言わんばかりにそわそわしながら、巴咲高校屈指の優等生、御咲麗一が昼食を食べている。

「なあにそわそわしてんだあ？麗一。鍵が掛かっている事になっている所に、先生殿は来ませんって」

そんな様子に気付いてか、サンドイッチを口の中に放り込んだ有無が麗一に話しかける。

「でも、校則違反だし……………」

「大丈夫よ。だって、今まで誰にも注意されなかったし」

「わ、私も…………あまり校則違反は嫌いですけど、できればこのような静かな所で食べたいです……………」

「まあ、確かにそれはそうだけど……」

そもそもここは、さっき有無が言った通り、鍵が掛かっていたのだ。それを1年生の頃、有無本人が無理矢理こじ開けて、そこで昼食を摂るようになったのだ。

そして今に至るわけなのだが……。

やはり止めるべきでは無かったのだろうか？

今更になって麗一は考えるのであった。

「あ、あの、御咲君の卵焼き、美味しそうですね」

瑠璃が麗一に、恥ずかしそうに言う。そんな瑠璃の問いかけに、

麗一は答えた。

「あ、これ？よければあげようか？」

「えー?! いいんですか! ? ありがとうございます……って、御咲君、何を……?」

麗一が、自分であげるといった卵焼きを、自分の箸で掴んだ。それを、瑠璃は不思議そうに眺める。

「あ、いや、箸どうして物を取るの マナーが悪いからさ、はい、

口開けて」

「へ……?」

「いや、いいから、あ〜んって……」

「あ、あーん! ?」

瑠璃は、顔を真っ赤にして俯くと、程無くしてがばつと顔を上げた。何かしらの覚悟を決めたような表情をしている。

「は、はい、どうぞ……」

「ん、はい」

瑠璃は、口の中に入った卵焼きを、上品に咀嚼する。かなり無駄なスキルではあるが、そのようにせよと育てられてきた瑠璃は重要な物と考えているようだ。

「……いつもながら、とても美味しいです」

「ありがとう」

頬を朱くしなら瑠璃が言った一言に、麗一が礼を返す。

「というか、式園さんのお弁当も毎度ながらかなり豪華だよ。1つ欲しいな」

「え？あ、ああ、これは、その、私が作ったんじゃないかって、仕えている者が作った物で……」

「美味しいの？」

「え、ええと……それは……私は美味しいと感じますけど、御咲君の舌に合うかどうかは……」

「それでもいいよ。1つだけ、何でもいいから」

「そ、そうですか。それじゃあ、このハンバーグで……」

そう言って、瑠璃は箸で、そのハンバーグを持ち上げた、そして、麗一のしたように、彼女もまた、食べさせようとする。

「み、御咲君……どうぞ」

「あ、食べさせてくれるんだ、ありがとう」

礼を述べた後、麗一はそのハンバーグを食べた。肉がとてもジューシーで、かと言ってしつこくない。手間暇かけて作られた1品だという事が窺い知れた。

「……むう、これは……流石に僕には出せない味だ。美味しかったよ。ありがとう」

「……そ、そんな、こちらこそ……」

「それにしても、いつもこんなに美味しい物を食べられるなんて、羨ましいなあ」

「え、あ、ありがとうございます。でも、御咲君のお料理も、じ、十分に美味しかったです……よ？」

「そんな、お世辞でもそんな事は無いよ」

麗一は気にも留めていないが、瑠璃は今の台詞を本気で言っていた。一流のシェフが作った料理を幼少から食べていた彼女でも、麗一の料理の出来には舌を巻く程だった。

「お、お世辞じゃないです、本当に美味しかったです……」

「ああああああっ！！あんたら何やってんのよオオオオオ！！」
瑠璃の台詞は、こちらを発見した恋歌の絶叫によってかき消され

た。叫んだ恋歌は、そのままずかずかところちらに寄って来る。

「見てたわよ、麗一……何させてたのかしら……？」

「え、ええっと、ですね、恋歌さん……」

必死の弁解を試みるものの、恋歌には既に『はいあくん』的なものを見られてしまっている。これは毀れも無い事実だ。

現状を確認した麗一は、最早弁解の仕様が無い事に気が付く。

……もう、僕は駄目かもしれぬ。

心の奥で覚悟を固め、最後の足掻きとばかりに話そうとする。

「あのね、怒らないで聞いて……」

「おおっとお！？どうしたあ！？修羅場かあ！？包丁とか鋸とかは持ち出すなよ才恋歌ア！」

「な、何が修羅場よ、いい加減にしなさああい！！」

「ぐへあああ！！」

たった今の有無の野次のお蔭で、恋歌の怒りの対象は麗一から有無に移行、某仮面ライダー顔負けのライダーキックを繰り出し、有無は奇声をあげ吹っ飛んだ。

「わ、凄……」

このCG無し、ワイヤー、ロープ共に無しのアクションに、瑠璃が素直な感想を漏らした。

「麗一いい！！」

「は、はいいい！」

怒鳴って名前を呼ぶ恋歌の迫力に押され、思わず声が裏返ってしまった麗一。

そのままどこかと寄って来る恋歌を見て、麗一は歯を食いしばった。

何が来るか。総合近接格闘か、それとも助走をつけてのドロップキックか。思わず身構える麗一だったが――

「は、はい！これ、食べなさい！」

出されたのはそのどちらでもなく（というか格闘技ですらない）、1つのエビフライだった。ちゃんとタルタルソースまで付いている。

「ほら、育ち盛りだからまだまだ食べれるんでしょー!？」

「え、恋歌、それ、恋歌の好きなやつじゃ……………」

「いいから!口をあけなさい!！」

これ以上何か言おうものなら、本当に体術を繰り出されそうだ。

麗一は素直に口を開けた。

恋歌は、「宜しい」と言っ、麗一の口の中にそのエビフライを優しく入れた。

「んぐんぐ……………っ、恋歌!シツポは取ってよ!！」

「あ、ゴメン、麗一」

麗一の指摘に手を前に出して謝る恋歌に、怒りの表情は見受けられなかった。機嫌が直って何よりだ。

「さして、今度は麗一から何かもらおうかしらね……………」

「え?いや、僕もう食べちゃったよ。それに、中身は同じだから、そんな事しても意味が……………」

「はあ!?大アリに決まってんじゃない!！」

「そ、そうなの……………」

麗一は困り顔で藍を見た。すると、瑠璃は微妙な表情で頷いた。

その仕草自体はちょっと可愛らしかったが、どうやら麗一の問いかけ自体がタブーの様だった。……………なぜだ?

「むづ……………無いなら仕方ない。缶ジュースで勘弁してあげましょう」

「う、うん、いいよ」

麗一は、後で恋歌に缶ジュースを奢る事になった。

自分を鉄拳制裁から救ってくれた有無にも後で奢ってやろう。麗一はそんな事を考えつつ、有無の方へと顔を向ける。

「……………」

麗一が視界に入れた有無は、何か見つけたように空を睨んでいる。

「……………有無?どうしたの?」

麗一が近づき、有無に声を掛けた。

「ん?ああ、いや……………あれ」

言葉で伝える代わりに、有無は空を指差した。

空は、雲一つ無い青空
——
いや。

空の片隅に、黒い雲が一つ、ポツリと浮かんでいた。
それは、みるみるうちに空を覆い隠し
——
ポツリ。

水の粒が、麗一の頬に一つ当たる。

「……………雨だ」

麗一は呟いた。

念のために傘を持って来て良かった。

「嘘でしょ……………？今日、傘持ってきてないのに」

「あ、あの……………2つありますから、貸しましょうか？」

「ホント！？ルリちゃん、ありがとね〜！」

そんなありふれた2人のやり取りを、有無はにやにやしながら見ていた。「何よ」と恋歌が有無に向かって言う。

「いやあ？お前ン事だろうから、麗一から借りるかと思つてたぜえ、大人になりましたねえ……………」

「んなあつ……………くつ、くたばれえっ！！」

「あべしっ！！」

顔を真っ赤にした恋歌のアップーが、見事に有無の顔を捉えた。

有無は意味不明な断末魔をあげて後ろへ吹っ飛ぶ。

もつとも、意味のある断末魔があるのかは分からないが。

「ほら、麗一、ルリちゃん、濡れちゃうから行くわよ！」

「え？あ、うん。有無、ずぶ濡れになる前に戻って来てね〜」

倒れ込んだ有無に話しかけた後、麗一たちは校舎へと戻って行った。

「いつてつてつて……………つつつ……………恋歌め、何も本気でやらんでも…

……………」

誰も居なくなつた屋上で起き上がった有無は吐き捨てるように文句を言った。

恋歌がいらない今なら、何を言っても構わない。ついでに誰もいない

から、『独り言を言う寂しい奴』とも思われない。

「……………あいつらも、早く言っちまえば良いのに……………」

『あいつら』とは、恋歌と瑠璃の事だ。

何気なく呟いた一言だが、この場にあの2人（特に恋歌）が麗一とペアでいると、この台詞に過剰反応するだろう。

……………その時でも、多分、麗一は何食わぬ顔をしているだろうな。

「……………鈍感すぎるぜ、麗一」

吐き出すように呟くと、有無は校舎に戻ろうとした体を後ろ向きに起用にひねり、屋上からの景色を眺めた。

さつきと変わらない、屋上からの景色。

———の筈のだが。

「……………?」

一瞬、何かが見えた。

今からずぶ濡れになるであろう、大地。

その大地の上に浮かぶ、2本の足を持つ、人の形を纏った、黒っぽい、巨大な何か。そんなようなものが、ちらりと見えた。

「……………」

……………見間違いか？

本当に、見間違いだっただろうか。一瞬にしては妙に臨場感のあった光景だった。

「……………まさか」

有無が呟く。

理由を問われれば、まず、こう言うだろう。
嫌な予感がした。

そう有無が思った時。

ドザアアアアア……………

空から、いきなりバケツを引っ繰り返したかのような雨が降り始め

た。

突っ立っていた有無は、無論、直撃を食らった。

「……嫌な予感って、これか!？」

ずぶ濡れになった有無は、チャイムが鳴るまでに着替えよう。そう思って校舎の中に引き返すのであった。

2

土砂降りの雨は、学校が終わっても止まなかった。

有無は学校で用事、恋歌は瑠璃に傘を借りようとしたのだが、その傘は瑠璃の迎えが持って来るので、その迎えが来るまで待つ事となった。

そのため、麗一は1人で帰る事にした。

「……1人で帰るのって、久し振りかもね」

呟いて、麗一は傘を広げた。

そして雨の中を家まで歩く。

学校から家まで帰るのは、行きに比べると道程が短いように感じる。

「……………」

家に帰ったら今日の授業の復習かな。そう思って歩いていると、もうすぐ自分の家だ。

この角を曲がれば、すぐそこに玄関が――

「……………!？」

麗一は我が目を疑った。

玄関の前に、何か(・)ある(・)。(・)。(・)。麗一は目を凝らして見てみる。

人だ。

玄関の前に、人が倒れている。

「……………!!」

気が付いたら、麗一は駆け出していた。

そしてそのまま倒れた人に駆け寄り、肩を揺する。

息はある。だが反応が無い。

倒れているのは、可愛らしい女の子だ。身長は100cm以上はあるだろうが、とても小柄だ。

更に言うと、彼女が身に纏っているのは、とても小柄なこの子が着てもまだ小さめの薄手のワンピースだ。傘も持たずにこんな格好でこの雨の中にはいずれ衰弱してしまうだろう。

しかし、救急車が必要だろうか？暖かくすれば、問題は無いかなのように思われる。

取り敢えず、自分の家に運び込もう。それで目が覚めたら、話を聞いてみよう。

麗一は、小さい体をだき抱え、家へと運び込んだ。

家の中に運んだ後、麗一は彼女をソファに寝かせ、そのまま暖かい毛布で包んだ。

流石に服が濡れているからといって女の子を身包み剥がす訳にはいかなかったので、服はそのままにしておいた。

問題のその娘は、すうすう、と可愛らしい寝息を立てて寝ている。

「……………」

妙に落ち着かない。今まで自分の家に、他の誰かと一緒にいるという出来事が、全くと言って良い程無かったからなのだろうか。

「……………本でも読むかな」

とにかく、気を紛らわせたかった。麗一は本棚から本を一冊取り出し、読み始める。

「……………」

麗一は、本を読むスピードも速い。あっという間に何ページか読み、次のページを読もうとページを捲ろうとした時。

「……………んっ」

声が聞こえた。麗一のものではない。

つまり、少女の物だ。

麗一がソファに近づくと、少女はまだ眠そうに眼をぱちぱちさせていた。

「気が付いたかい？」

麗一が話しかけた。少女は一旦びくつと体を震わせると、麗一の方へと向いた。微細ながら、目が見開かれているのが分かる。

「あ、ごめんね。驚かすつもりは無かったんだ。」

麗一は驚かせたのでは、と思い、反射的に謝った。
すると、少女が反応した。

「……似てる」

ポツリと、無機質な声が麗一の耳に届く。まるで耳を素通りして行くかのような、平坦な声だった。

「え？えつと……今、何て？」

「……いえ、何でもありません」

少女は、またしても無機質な声で返答をする。

「……ここは、どこですか？」

少女は尚も続ける。彼女は輝かしい銀色の髪を持っている。それと相反するかのような、宇宙空間のような漆黒をたたえた瞳が麗一を正面から見据える。

「ええつと……ここは僕の家だよ」

「……そうですか」

質問が終わると、少女は黙り込んでしまった。

……

気まずい沈黙。

その沈黙の間、ずっと少女は麗一を眺め込んでいた。

腰まで届く長い銀色の髪、ほんのりと朱に染まっている淡い白色の頬、濡れてしまつて、肌が透けている服、その全てが、食い入るように麗一を見つめる。

「……ええつと、君の名前は？」

この状態に耐え兼ねた麗一は、とにかく話しかけてみようと思い、少女に質問した。

「……………?」

少女は、首を傾げる。

「……………私の、名前?」

「そ、そうそう! 仲良くなるには、まずお互いの名前を知っとかないと。こんな所で出逢ったのも、何かの縁、運命の出会いだよ」

「何かの、縁……………。運命の出会い、ですか」

「う、うん……………、まあ、ね」

運命の出会いなんて面と向かって言われると照れくさいな。

麗一がそう思った時、彼女は思いもよらぬ事をした。

「そうですか、では、運命の出会いを祝して」

そう言い放って、彼女は麗一に顔を近づけた。

そして――

「!……!」

麗一の唇を奪った。

麗一としてみればたまった物では無い。いずれは愛する人と交わすために取って置いていた、いわば『最初の口づけ(ファースト・キス)』を、まだ名前も知らない(というか知りたいのに返答をしない)少女に奪われてしまったのだから。

しかし少女は、そんな麗一の心境など露知らず、何とも大胆に舌まで入れてきたのだ。

他人にとって羨むべき状態である当人は、そうでない状態を羨む。

そんな言葉を思い出し、そして思い知った麗一だった。

「な、なな、なな……………」

「……………ふうむ、誤差、+0,01……………!」

「い、いきなり、な、なにをするんですかあ!」

麗一の猛抗議を全く無視して、少女は麗一の手をがっしと掴む。そして少女は、こう言った。

「……私たちは、本当に、運命の出会いをしてしまったようです」
「はい！？」

少女は納得していても、麗一は、少女の言っている言葉の意味が全く分からない。

そもそもそれ以前に、いきなりキスをされた麗一は、頭が混乱して思考が全くまとまっていない。こんな状態の人間に話しかけても物事が理解できる訳が無い。

「う、うう、運命って、な、何を言ってるんですか。お互い、まだ何にも……」

「それは、これから知れば良いんです」

「は……？」

それは一体どういう意味だ。麗一は叫びたい気分だった。

「……手始めに、貴方の名前を教えてください」

「え……」

「こういう時は、まず男性からというのがマナーです。」

「あ……うん……」

興奮していた頭が徐々に冷えていって、冷静になって来ると、麗一は、相手が自分を丸め込むように話を進めようとしているのが分かった。まあ、話を仕切ろうとしてくれるのなら、それでいいのだけだ。

「僕の名前は、御咲麗一。麗一でいいよ」

「ミサキ レイイチ……」

「そう、それが僕の名前」

「そうですか……」

「……」

気まずい沈黙は変わらずだが、麗一は、この娘と話している間、不思議なものを感じていた。

話していると、心が穏やかになってくるのだ。

そして、いつの間にかすっかり落ち着き、まるでセラピーを受けたような気分になった麗一は考えた。

彼女は一体何者だろうか？

答えは出る筈も無い。

答えが出ない問題は考えない。麗一は思考を中断して、彼女の言っている事を良く聞くようにした。

「それでは、私の名前を」

「あ、うん。何て名前なの？」

「私の名前は……カノン・ブレスタ。カノンで、いいです」

「カノン・ブレスタ……って事は、外国の人！？」

「……いえ、違います」

麗一は驚いたが、カノンと名乗る少女はそれを否定する。

「じゃあ、どんな生い立ちなの？」

「……知りたいですか？」

「うん。できればで良いけど、良かったら教えてくれないかな？」

「……話すと長くなると思います」

「君さえ良ければいいよ」

麗一はなるべく会話を続けるために矢継ぎ早に対応をした。しかし。

「……………」

「ここで、彼女は黙り込んでしまう。」

「……えっと、どうしたの？」

「……約束してくれませんか？」

「え？」

「今から私が言うことを、全部信じると約束するのなら、話します。」

「」

「……カノン？」

麗一は、想像がつかないでいた。

これからこの娘は、何を言うんだらうか？

多分、突拍子も無い事を言うんだらうか……。

だけど、この娘の眼は純粹だ。曇りが一切無い。嘘をつくなんて事はしないと思う。

麗一は、この娘を信じてみようと思った。

「……分かった。約束する。信じるよ。だから、話してみて。」

「……分かりました。それでは」

カノンは長い沈黙の後、ふう。と、息を吐くと、ポツリと告げた。

「……私は、別の世界からやってきた、人工的に作り出された人間です。……いえ、人の解釈によっては、人間かどうかすら危うい存在です」

「……え？」

自嘲的に、カノンは言った。麗一は疑問符を付けた返事を返してしまっただが、カノンはより詳しく言い直した。

「私の頭には、脳の代わりに有機性超高度思考発生装置が埋め込まれています。つまり、生きたコンピューターみたいな物です。」

「……」

麗一は、言葉が出なかった。

何にせよ、彼女の言っている事を要約すると、「自分は生きたオーダーテクノロジーです」という事なのだ。普通の人なら、到底信じる事はできないだろう。

しかし、麗一は彼女と『話を信じる』という約束をした。

ここは、仮説を立てて無理にでも理解するんだ。と、麗一は口から出かかっていた言葉を飲み込んだ。

麗一の、脳の中で仮説を展開し、理解しようと思死に考え込んでいる様を見ていたカノンは、麗一に向かって呟いた。

「麗一さん……やっぱり、無理でしたか？」

これは、カノンの心からの言葉だった。カノン自身、無理な約束をさせた。そう思っていた。

麗一は、突然話しかけられて戸惑ったが、必死に言葉を紡いだ。

「え……いや、僕は信じるよ。だけど……」

麗一は一呼吸おいて、言った。

「僕は……『君が人間じゃない』だなんて、言ってほしくないな。」

「……………ッ」

カノンは、麗一にそう言われると、少し頬を朱にそめて下を向いた。そして、照れくさそうにこう言った。

「……そんな事を言ってくれたのは、麗一さんが初めてです……ありがとうございます」

「え、あ、どうも……」

麗一は、こんな時はこう答えるのが当たり前だと思っていた。それなのに、そんなに感謝されるとは思いもしなかった。少し照れくさい。

麗一は、中断した思考を再開し、カノンに詳しい事を色々聞こうと思っていた。仮説と言っても、情報が無ければただの妄想だ。全く意味が無い。

「ねえ、カノン。どうしてこの世界に来たんだい？」

「……はい。私は、ある目的のために、仲間と一緒に地球のあるこの世界にやってきました。しかし、私は、元からその目的には賛同しかねていて、それが元で共にこの世界に来た仲間と意見がすれ違い、裏切者扱いされました。私はそれから、この星の人に、仲間の目的を伝えに来たんです」

「へえ……その目的って？」

麗一は、おそらく興味本位で聞いたのだろう。

しかし、帰ってきた返答は、耳を疑う物だった。

「仲間の目的は……この星の侵略です」

「へえ……はい？」

侵略？

「……ごめん、もう一回言ってくれないかい？」

もしかしたら、聞き間違えたかも知れない。淡い期待にすがって、麗一はもう一度、カノンに聞き返した。

しかし、帰ってきたのは非情な回答だった。

「……仲間の目的はこの星の侵略です」

間違い無い。今、彼女ははっきりと、『侵略』と言った。

侵略！？地球を！？

「そんなの、冗談じゃない！！」

「でしょう？私も貴方と同じ気持ちです。私はこの星の生物の命を私たちの都合だけで無下に奪う訳にはいかない。そう、思ったのです。」

「だから、仲間を裏切った。と……」

「まあ、そのようなところです」

「……………」

あまりの話に、麗一は続けるべき言葉を紡ぐ事ができずにいた。

そしてカノンは、またしても厳しい現実を言い放つ。

「私は、この世界の時間で言う、正午過ぎにこの世界にやってきました。そして、ここに辿り着く数時間前、私はこの世界の『インターネット』と言う物で、世界の兵力や、武器の性能などを調べ、細かく分析を試みました。もしかしたら、この世界の兵力は、かつての仲間が用意した侵略用の兵器に十分対抗できるのではないか。そう思ったのです」

ですが、と、カノンは首を小さく横に振ると、続けた。

「この世界の兵力では、あの人の作った兵器には歯が立ちません。私の計算では、あの人たちの所有する全部の起動兵器を投入したとすると、10日もしないうちにこの星は制圧されます。」

麗一はその絶望的な発言を前に、黙り込むしか選択肢が無かった。対抗できるかできないか。その問いの答えは薄々分かってはいた。世界を超えられる力を持つ相手に、地球の人類の科学力程度では勝てる筈が無い。そう思ったのだ。分かってはいたのだが、いざ指摘されると、どうしても気分は落ち込んでしまう。

沈黙が部屋を包む。

その沈黙を破ったのは、麗一だった。

「……………どうにも、ならないのかい？」

麗一は、この星がいずれ彼女の仲間、言い換えた所の『異世界人』によって侵略されてしまうという事実を、どうしても納得がいかな

かった。

「僕たち、地球人が生き残る方法は、無いのか？」

麗一はカノンに言った。これで「無い」と言われたらそれまでだ。そしてカノンは、無言でうなずいて、言い放った。

「ありますよ」

その言葉が今の麗一にとって、どれほどの心の救いになったか解からなかった。

「あるのか！良かった……」

絶望感が一気に希望へと変わり、ほっと胸をなでおろす麗一。その過程で、必然とも言える疑問を麗一は抱いた。

———
それって、どんな方法なのだろうか？

「カノン、それで、その方法って……？」

麗一は、カノンに尋ねた。

この一言が彼の運命を変えてしまうとは、麗一はまだ知らずにいた。

「私は、あの集団から抜ける前に、機体を一つ、強奪しました。」

「え？」

キタイ？キタイって、何の事だ？

「その機体は、あの人の造り出した機体の中でも究極と言わしめる機体であり、絶対無比の力を持っています。この機体であれば、いくら彼女らと言えど……」

「ちょ、ちよっと待って、ストップ」

「はい……？」

まさか、と思い、麗一は会話を一旦止め、質問した。

「キタイ、って、何の事、かな？」

「……機体は機体です。……そうですね……分かり易いように言えば、ロボットの事ですよ」

「るぼっと……？」

「詳しく言つと、戦闘用に開発された人型の兵器の事です」

「……………」

……なるほど。

麗一は、彼女がこれから何を言おうとしているのかを、解かったよ
うな気がした。

「……………あの、カノンさん。まさかとは思うけど、僕にその機体とや
らに乗って戦え、なんて言わないよね？」

「麗一さん……………」

何言つてんだコイツ。と思われても構わない。麗一はただ、その次
の言葉に「そんな訳無いじゃないですか」という台詞を期待してい
るだけなのだ。

頼む。麗一は願った。

「……………凄い。よく分かりましたね」

そんな麗一の願いは、超が付くほどあっさりと碎かれてしまった。
希望と思つたものが（少なくとも自分にとっては）そうでないと
知り、諦めのムードが麗一の頭を包み込む。

と、同時に、この理不尽な扱いに対する、静かだが猛烈な怒りが
湧きたつた。

どうして僕なんだ！麗一は思った。

「な、何を言つてるのさ！どうしてそんな……………！！」

「貴方以外にできないのです……………」

「だからどうしてさ！！」

「麗一さん、落ち着いて下さい」

「ッ……………！！」

確かに、彼女の言う通りだ。ここで騒いだって何にもならない。

怒りの感情が萎み、麗一の心にカノンに当たった事への後悔の念が
湧き上がる。

麗一は、無理にでも気を落ち着かせた。

「……………分かったよ。じゃあ、何で僕なんだい？」

ひとまず落ち着いた麗一は、一番気になっていた事を尋ねた。

「あの人の作った機体には、搭乗者の脳波を測定する機能が付いています。そして、登録されている脳波以外の人間が乗っても、稼働しないんです。」

「なるほど、防犯対策みたいなものか……。でもそれじゃあますます、僕が乗っても意味が無いんじゃない？」

麗一は、話を理解し、その過程で生まれた至極まっとうな意見を言った。だが、カノンは否定する。

「私も初めはそう思ったんです。ですが、1つ盲点がありました。カノンは、「これから話す事は、この世界の人にはちよつと難しいかも知れませんが」と前置きを挟んでから、また話し出した。

「世界は、1つではありません。この世界の他にも、無数の世界が広がっています。」

「……それは、今までの話から、何となく分かるよ」

何となく分かる、というか、認めざるを得ない状態になってしまっている事に、麗一は言った後に気付く。

カノンは、気休め程度にしかならないだろうが彼が話を呑み込み易くするように、少し間を置いてから、続けた。

「その1つ1つの世界は違くとも、そこにあるものの『存在の波形』はどの世界でも共有されている。……解かりますか？」

「んんんん……。ああ、何となく分かった。つまり、違う世界でもそれと同じような存在がある。という事かな？」

「ん。満点です。例えば、道に落ちている石があれば、大きさや質量、その元素や構成などに多少の差異はありますが、同じような物が別の世界にも存在します。この世界に住まう猫なども、同じ様な個体が別の世界にも存在します。私たちはそれを『同一因果共同体』と呼んでいます。」

「同一因果、共同体……」

麗一は、重要そうな単語を復唱した。

「はい。……ですから、それに基づいて考えた時、内面などは多少違くとも、この世界でも機体に登録されている脳波とほぼ同じ脳波

を持つ、『同一因果共同体』がいる。という事に気が付いたのです。そして私はこの世界で、その方を探させて頂きました。」

そこまで言って、カノンは麗一の事をしっかりと見つめた。

「……そして、私は見つけたんです。『同一因果共同体』を」

「それが、僕だっけ言うのか……どうやって分かったんだい？」

麗一が質問をすると、カノンは頬を赤らめ、恥ずかしそうに言った。

「……さ、さっきの、キスで……」

「あ……そうかい……」

この返答に、麗一は黙らざるを得なかった。これ以上この事を話すのは、お互い嫌だろうからだ。少なくとも麗一はそう思う。

麗一は脱線した話題を再び元に戻した。

「……そ、それで、やっぱり、僕が乗らないといけないのかい？」

「はい」

カノンは麗一に、はっきりと言い渡した。生き残るためには、自分の身を削るような真似をしなければならぬ。余りにも厳しい現実、麗一は俯いてしまう。

「……戦え。って、言うのか？この……こんな僕に」

「……申し訳ありません」

カノンは謝罪する。だけれども、言葉を続けた。

「……麗一さんにしか、できない事なのです。もし、麗一さんが何もしなければ、間違い無く、貴方も含めた大勢の人が文字通り無に還ります。」

カノンはこの台詞の『文字通り』の部分に力を込めて言った。それほどの技術差があるという事を麗一に間接的に伝えるためだ。

「……」

麗一は、黙っていた。

戦う意思が固まっていないのか、それとも、ただ単に現実逃避して居るだけなのか。見ているカノンには解からなかった。

カノンは、黙り込んでいる麗一に、励ますようにこう言った。

「……麗一さん、戦うのは麗一さんだけではありません」

「え……」

「どうやって、私が機体を強奪したと思いますか？」

「あ……」

「私も、その機体の搭乗者です。2人乗りなんですよ。あの子は」

「……！」

カノンも、搭乗者！？

麗一は驚愕に目を見開いた。

「出来れば、麗一さんを始め、この世界に住まう方々には迷惑を
けず、私1人だけで戦いたかった。ですが、私の方の搭乗席は、機
体の調整しか出来ませんから、機体自体は動かせないんです。でも、
貴方が……麗一さんさえいれば、機体を動かせる。一人前に戦えま
す……だから……」

「そう……か」

「麗一さん…… お願いです」

漆黒の瞳に光る物を溜め込み、まるで黒い湖の様になった彼女の眼
が、麗一をとらえる。さしずめ、水面に映った人の顔のようであっ
た。

「……ふっ」

その映った顔が笑う。つまり、カノンの目の前にいる麗一が笑った
のだ。

「……麗一、さん？」

急に笑った麗一を見て、カノンは首を傾げる。

「これって、運命、ってやつかな……？」

麗一は、カノンに尋ねた。

「……それは、分かりません」

「だよね……。だけど、僕にしか……僕だけにしかできないのなら
……」

そこまで言って麗一は、こくりと頷いた。戦うという意思表示だ。
「麗一さん…… ありがとうございます……」

カノンがやや深めに頭を下げる。声は相変わらず無機質だったが、

嬉しそうにも聞こえた。

頭を下げた後、カノンが手を差し出した。

「?……何だい?」

「……握手です」

「ああ……」

差し出された手の意味が分かった麗一は、その手を握る。

そういえば、キスした後、カノンは僕の手を握ったな。麗一は思い出す。

その時は、焦りの余り感じ取れなかった彼女の手の温もりを、麗一は感じた。この、暖かくも小さい手が、この世界の救い主の手だと思うと、いつも傍にいて、彼女の役に立ちたい。麗一はそう思えるようになったのだ。

麗一とカノンは、お互いに見つめ合う。

その時——

バン！

もの凄い音でドアが開けられ、まずは恋歌、続いて優歌が部屋へ入ってくる。

「麗一！いつまで待ったら来るのよ！夕飯はどうした……って、あれ……?」

「むにゅ……お腹空いた……つきゃー!!その娘可愛いー!麗ちゃん、どこで見つけたのー!」

勢いの良かった恋歌の声は羨み、その代わり、可愛いものが好きな優歌が奇声を上げた。

「ええつと……麗一さん、これは……」

「れ、麗一！その子誰よ!誰との子よお!」

「人聞きの悪い事を言わないでくれ!」

困惑するカノンをよそに、やや論点がずれた口論を始める麗一と恋歌。2人は今まさに、近所迷惑を具現化したような存在となってい

る。

「2人とも、し〜ず〜か〜につ〜!!」

ふいに聞こえた大きな声に、麗一と恋歌は驚いた。声を発したのは以外にも、いつもマイペースな優歌だった。

優歌は、「恋歌ちゃんと麗ちゃん、ケンカしない」と2人を諷める。その後、優歌の視線は、先ほどから興味の対象となっていたカノンへと移る。

「で、麗ちゃん。この娘だ〜れ?」

麗一に問いかける優歌の後ろで、恋歌は「うんうん」と言わんばかりに腕を組み、首を縦に振る。

「え、え〜つと、ですね……」

麗一は返答に困った。誤魔化すにしたって、いきなりの事でそこまで考え付かないのだ。

「いいです。麗一さん」

何かと弁解しようとする麗一を、カノンが制す。余計な事は言わない。という事だ。

麗一を制した後、「全部話します」と言うカノン。麗一はたまらず彼女を奥まで引っ張り、耳打ちする。

「話してもいいの?はつきり言っつて、あの人たちが信じるかどうか分からないよ?」

優歌はどうだか分からないが、恋歌はそういう類の物は「嘘だ」と言い張る奴なのだ。麗一は長年の付き合いでその所を肌で感じていた。

「そこは麗一さんが何とかして下さい」

なげやりの様なカノンの物言いだが、あくまでも彼女は真剣だった。

はてさて、どうなるものかね。

麗一は底知れぬ不安を感じながら2人を説得する事にした。

説得している間、麗一は、カノンが何か言う度にケチを付けそう

になる恋歌を宥める役に徹した。優歌の方はと言つと、始めは半信半疑だったが、持ち前の人一倍の好奇心で話にのめり込んで行き、最終的には麗一に向かって「ファイトイツパーツ!! 頑張つてね、麗ちゃん! 地球の未来を守るんだあ〜」などと、ほぼ他人事のような態度だった。

……本当に、この人は保護者なんだろうか。

自分の身を案じない優歌の態度に、麗一は泣きたい気分になった。

「……話は以上です」

カノンが話を終えた。

「恋歌……大丈夫? 付いて来てる?」

麗一は、魂が抜けたような恋歌に話しかける。恋歌は、麗一ほど頭がよろしくない。スケールが余りにも大きい話に、オーバーヒートを起こしてしまったようだ。

最初は何かと理屈を付けて反論していたのだが、話の後半になって来ると「もう疲れた」と言わんばかりに全く話さなくなってしまった。今は、酸素が足りない金魚よろしく口をパクパクさせている。

「それにしても、麗ちゃん大変ねえ……いきなりロボット乗るんでしょ〜?」

優歌が、まるで世間話の様に話しかける。この人は何でこんなに他人行儀でいられるのだろうかとやや疑問に思いつつ、麗一は首を縦に振った。

「大丈夫! 麗ちゃんならいけるよ! 頑張つてね!」

優歌はウインクして、麗一の肩にポンと手を置いた。

その直後、ガバツと恋歌が体を起こす。

「お姉ちゃん……本気なの?」

この期に及んでまだ口答えする気のようにだ。

「恋歌ちゃん、まだ信じられないの?」

優歌は、優しい声で恋歌に話しかける。

「だ、だって……麗一が……麗一が、ロボットに乗るなんて……そんなの、信じらんない……」

それはそうだ。僕自身未だに漠然としているというのに。麗一は理解した筈なのにどこか逃避していた自分を情けなく思った。

そんな麗一をよそに、優歌は続けた。

「でもね、恋ちゃん。彼女の眼を見てみなさい。とつても真剣ですよ？」

「……………」

「だから、信じてあげよ。ね？」

「……………麗一は、いいの？」

恋歌は、ふいに聞いた。麗一は答える。

「僕は、この娘を……………カノン信じると、約束したから」

「……………そう」

苦笑いしながら答えた麗一を見て、恋歌はポツリと呟いた後、ふつと笑った。

「……………ああもう、いいわよ、信じるわ。……………そこまで言うならね」

恋歌は、話に同意し、麗一はホッとす。

まず1つ、重荷が外れた。

そんな麗一をよそに、優歌がカノンに語りかける。

「ねえ、カノンちゃん。今日はお泊りするところはあるの？」

「……………あ」

優歌に尋ねられたカノンは、返答を返さず俯く。そして、言った。

「……………お恥ずかしながら、確保しておりません……………」

彼女の話では、この世界に来たばかりなのだ。見つかっている方が変だ。

そう思っただけ聞いていた麗一だが、この後の優歌の台詞で度肝を抜く事になる。

「それじゃあ、今日からカノンちゃんは私たちの家族です！宜しくね〜」

麗一と恋歌は、あまりにも突拍子の無さすぎる話によるけそくなる。

「姉さん……………」

「あら？麗ちゃん、イヤなの？」

「いや、そういう訳じゃ……」 今から家族にするのは賛成なのだが、書類だけの身分証明だの何たので大変になる。と麗一は思うのだ。多分、恋歌も同じ気持ちだろう。

そういう事を言いたかったのだが、優歌の「大丈夫、どうにかなるって」で抑え込まれてしまった。

本当にどうにかなるのなら、それに越した事は無いんだが……。

「カノンちゃん、そういうえば服がビショビショじゃない。替えは……ある訳無いか」

優歌が言う。そう言えばそうだった。長つたるい話が続いたせいで、麗一も彼女の服の事をすっかり忘れていた。

「じゃあ、服は私のコスプレ……じゃなくって、ちっちゃい奴を持って来るから、カノンちゃんはここでお風呂に入っというてね」。恋歌ちゃん、ダツシュ！」

「おっけー！すぐ取って来るね！」

いや、ちよつと待って。麗一はそう言いたかった。

使い方が分からなかったら……その時点でカノン本人はもう既に本格的に入浴する体制になっているという事じゃないか。それはちよつと、いや、ちよつとどころか、かなりマズい気がする。

……入る前に一通り教えてあげよう。麗一は思った。

「それにしても、お腹がすいたよおお……」

麗一が一通り回想を終えた時、優歌が液化化したかのように床に崩れ落ちた。

「あ……どうしようか、夕飯」

難しい話で、空腹もすっ飛んでしまっていたのだ。気が付けば、尋常ではない空腹が麗一を襲う。

「麗ちゃん、何か作つという……」

「分かりました。カノンがお風呂から出たら、そっち行きますんで……」

「おっけー……それじゃあ、待ってるよ……」

げんなりした優歌は、それだけ告げると自分の家へと帰って行った。

家に残っているのは、2人の男女。

「……………」

自分はどうすればいいんだ。と言わんばかりのオーラを漂わせたカノンが、麗一を見つめる。

「……………」と、取り敢えず、お風呂場へ行こうか……………」

無言の圧力を受けた麗一は、カノンを風呂場へ連れて行った。

カノンの着替え(どう見てもコスプレ衣装なのだが)を受け取った後、一通り風呂の使い方を説明し、カノンを入浴をさせる事に成功した麗一は、夕食を作り始めた。

何にしようか。と言っても時間があまり無いので、唐揚げを大量に作り、それを元で白米を平らげるといって『唐揚げランチ』なるものを作る事にした。

この料理は、揚げ物好きな逢坂家が考案し、優歌と恋歌の母が生きていた時からあった料理である。主に料理を作る時間の無い時などに麗一もよく作る。

「……ふう」

揚げ物を終え、ソファに座って息を吐き出した麗一は、ふと気付く。

今度から3人前が、4人前になるのか……。

家族にカノンが追加されれば、当然食事を作る量も増える。

当たり前の事だが、いつもと違う食材の量に、麗一は違和感を感じずにはいられなかった。

そんな事をぼんやりと考えていると、リビングのドアが開いた。麗

一は反射的に振り向く。

「……………!!!」

途端に、麗一は顔を真っ赤にしてソファから転げ落ちた。

それもその筈、そこにいたのは入浴を終え、よりにもよって全裸に近い状態でドアの近くに立っているカノンだった。

濡れたままのその肢体は、幼い身体付きながらも艶めかしい色気を持っており、じっくり見ようものなら危ない何かに目覚めてしまいそうな、なんだかよくわからないパワーのような物が――っ
て、僕は何を考えているんだ!?

麗一は、倒れながらも脳内で補完している自分を恥ずかしく思った。

「麗一さん、お風呂から出ました。……麗一さん？」

「……！！」

立ち上がった麗一は、目を覆い隠して壁に向かって指を差し、パクパクと口を開閉させている。

何かを伝えたい。それは解かるのだが、カノンはそれ以上理解できなかつた。

しばらくして麗一は、何とか声を絞り出し、こう伝えた。（と言っても、呂律が回っていなかったのだが）

「……バ、バスタオル、出てる、筈、なん、だけど、さ、あ、あれで、か、身体を、拭いて、できれば前を……か、隠して来て、くれないかい？」

「……あ」

ここでカノンは、なぜ麗一が慌てふためいているのか、その理由が解かつた。

「す、すみません。それ、取ってきます……」

カノンは、顔を真っ赤にして、再び風呂場へと戻っていった。

しばらくして、バスタオルを身体に巻いたカノンが、リビングへと入って来た。

カノンは、そのまま無言で歩いて来て、ソファに座っている麗一の隣へと腰を掛ける。

そして、カノンが口を開いた。

「……すみません。あのようなはしたない所をお見せしてしまって

……」

「いや、あれは……僕も悪かつた。お風呂から出た後の事を言っただけで……」

麗一は、カノンに謝り返した。これは、事故とはいえ彼女の全裸を見てしまった麗一なりの反省の意の表れだった。

それに対して、カノンは「そんな事は無い」と言う。そして、一言付け加えた。

「……麗一さんって、お優しいんですね」

カノンは、一瞬どきりとするような笑みを浮かべた。

「あ……ありがとう、う」

引き攣った喉から声を出す麗一。語尾が吊り上ったのは気のせいではないだろう。

「……まあ、いいや。それよりも、さ、これ、着替えだから。取り敢えず、これに着替えて。僕は自分の部屋へ行ってるから。終わったら呼んでね。そしたら、一緒にご飯を食べに行こう」

麗一はこれ以上アレを引きずるのはゴメンだとばかりに話題を逸らす。

「はい」

「……じゃあ、ね」

麗一は、それだけ告げると、2階の自分の部屋へと移動した。

程無くして、麗一の部屋のドアがコンコンと鳴る。

麗一がドアを開けると、ドアの前にはカノンがちょこんと立っていた。

カノンが着ている服は、優歌が昔作ったという、コスプレ用のワンピースだ。本来は優歌が着るために作ったらしいのだが、これを着ているアニメのキャラと同じ体格の人が着れるように作ってしまったため、誰も着る事ができずにお蔵入りとなった代物らしい。

『熱中している時に間違えると、そのままノンストップで作っちゃうの……そーゆうものなのよおお……』

昔、泣きながら机に突っ伏していた優歌を思い出した麗一だった。しかしまあ、良く似合っているなあ。麗一は感心した。

何よりも、カノンが銀髪と言うのもあるからだろうか。白色のワンピースは目移りしそうな程に眩しかった。

以上、考察終了。考えを振り払い、麗一はカノンに確認する。

「あ……着替えは、終わったの？」

「あ、あの……」

カノンは、聞かれてそれとなくもじもじする。

「えっと……どうしたの？」

「……あの、麗一さん……」

カノンは、隠して持っていた物を、気恥ずかしそうに取り出す。

それは、カノンの着替えとして渡された一式の中に入っていた下着、ブラジャーだった。「え？」と、いきなり下着を見せられて、僅かに赤面して困惑する麗一に、カノンは言った。

「こ、これ、胸当て……なんですけど……付けていると、むずむずして……痒くなっちゃって……その、外してしまいたいんですけど……いいですか？」

「……あゝ」

困った。

麗一は、同居人の洗衣服の洗濯で下着には慣れているとはいえ、こういうケースは初めてだった。

「……と、取り敢えず、僕から姉さんに返しておくよ」

「助かります……」

下着を受け取った麗一は、カノンに先に玄関で待っているように言うと、ゆっくりと階段を下りて行き、溜息を吐いた。

「……それじゃあ行こうか。カノン、ちょっとこれを持ってくれないかい？」

「……はい」

麗一は、家を出る準備を済ませた後、唐揚げの入った籠をカノンに持たせた。

「……これは？」

「ああ、それかい？それはね、唐揚げって言う料理だよ」

カノンは、唐揚げを見るのは初めてだった。質問された麗一は、扉に鍵を掛けながら、問い掛けに答える。

「カラアゲ……？」

「ふふっ、美味しそうでしょ？」

「……………はい」

「1つなら、食べてもいいよ」

「……………本当ですか？」

「うん」

カノンは、麗一に言われた通り、食べようとして唐揚げを1つ摘まもうとした。

湯気を立てている唐揚げは、やはりまだ熱く、ちよんと触ったカノンは「熱っ」と言っつて、直ぐに手を引っ込めてしまった。

「あ、大丈夫？火傷しなかつた？」

「大丈夫です」

麗一が聞いてくる。カノンは直ぐに答えた。

「良かった。じゃあね……………」

そう言っつと麗一は、唐揚げを1つ摘まむ。

熱さを我慢し、そのままそれをカノンの前へ持つて行つた。

「はい、カノン」

「……………？」

差し出された唐揚げを見て、カノンは何をしていいのかわ、直ぐには分からなかつた。

一瞬考えた後、カノンは解答を導き出す。

「……………口を開ければいいんですか？」

「そつだよ。はい、あゝん」

「あゝん……………？」

カノンは首を傾げる。すかさず麗一が補足した。

「誰かに食べ物を食べさせる時は、大体そつ言っつんだよ」

「……………なるほど」

一応の納得はしたようだ。カノンは、口を開けて麗一の持つ唐揚げを食べた。はふはふと言いながら唐揚げを飲み込む。

「……………！」

「熱かつたかな？」

「……………熱いですよ。でも、美味しがつたです。気に入りました」

心なしか嬉しそうだ。お世辞ではなく、本当に気に入ったらしい。

「そっか。それは良かったよ。もっと食べたいかい？」

「……はい」

「でも、皆で食べた方が美味しいよ」

「……そうですね」

「それじゃあ、行こうか」

「はい」

そう言って、2人は洋菓子店『rainbow』まで歩いたのだ
った。

「ふにゃ〜！腹いっぱい〜……」

夕食の終わった優歌は、ソファへと飛び込む。

「すぐ寝ると太っちゃわよ、お姉ちゃん……」

「はううー！そうだったあ！お姉ちゃんダイエットしてたんだつたあ、ううう、結構食べちゃったなあ……」

恋歌の言葉でショックを受けた優歌は、お腹のあたりをさする。

「え〜っと……一応、カロリー控えめな油で揚げたから、大丈夫かとは思いますよ……？」

「ホントお！？麗ちゃん、気が利くウ〜！」

皿洗いをしながらの麗一の一言で、しよげていた優歌がぱつと笑顔になる。

それにしても、お皿くらい洗ってくれてもいいのに……。

優歌の綺麗な笑顔を眺めながら、麗一は思った。

「……ごちそうさま」

カノンが箸を置く。それを待っていたかのように、優歌が話しかけた。

「あ、ねえねえ、カノンちゃん。寝る時は、麗ちゃん家とココ、どつちで寝たい？」

「え……」

「カノンちゃんの好きな方でいいよ〜」

二カニカと笑いながら言う優歌だったが、優歌は元々が小さい娘が好きなのだ。夜な夜な優歌がカノンに対して、とんでもないイタズラをするのではないか。と麗一は不安になる。

そう言えば、カノンって、今ブラジャーを付けてないんだっけ。

……危うい。麗一は危惧した。

頼むから自分の家を選んでくれ。麗一はそう思っただが……

「……………」

麗一の心を見透かしているかのような、そして何だか違う解釈の仕方をしたような、そんな恋歌の視線が、麗一に集中砲火を食らわせる。

「……何さ、恋歌」

「……べつつにい」

ぶいっとそっぽを向かれた。どうやら機嫌を損ねてしまったらしい。……なぜ？

麗一は訳が分からなかった。

「えっと……………」

「別に、迷わなくてもいいのよ？カノンちゃん」

「そ、それじゃあ……………麗一さんの方で」

心なしか弱い声で、カノンは言った。

「えええ！？」

それに食い付く恋歌。

「……………どうしてよ」

恋歌は、ほんの少し威圧感を滲ませた声で問う。それに、カノンは答えた。

「……………いずれにせよこの世界には、直ぐには彼らは攻めて来ないと思います。まだ猶予があるという事です。ですが、これはあくまで仮説に過ぎません。もしかしたら、明日攻めて来るかも知れない。

そんな時に、唯一の防御手段である機体を動かせる私たちが一緒にいなければ、直ぐには出撃できません。ですから、できる限り麗一さんとは一緒にいたんです。」

「ああ、なるほどね」

謎が解けたぞ。と言わんばかりの表情でポンと手を置く恋歌。

「……むう、それなら、仕方無いかなあ」

なぜか残念そうに呟いた後、優歌も同意の意思を示した。

「うつつ……残念だなあ……」

そう言つて、涙目で俯く優歌。

そんな顔をされると、こつちが俯きたくなって来るよ。麗一は思った。

という事は、優歌はさっき麗一の考えた『とんでもないイタズラ』を仕掛けるつもり

だったらしい。回避ができて何よりだ。

「それじゃあ姉さん、恋歌、僕はもう帰るね」

食器洗いを終えた麗一は、話も程々に帰る準備をする。

「え、ちょ……」

「あ……待つて下さい、麗一さん」

なぜか麗一を引き留めようとする恋歌だったが、その声はカノンの声とかぶさってしまった。

釣られるようにカノンも、玄関へと向かう麗一に付いて行く。

「それじゃ、また明日ね」

「……また明日」

優歌と恋歌に別れを告げて、2人は家へと戻って行った。

「心配なの？恋歌ちゃん」

麗一とカノンが去った後、優歌は恋歌に話しかけてきた。

「うん……まさか、そんな事は無いと思うけど……ね」

恋歌は、麗一とカノンが2人きりになる事を快く思っていなかった。

もしかしたら、麗一が夜な夜な、カノンにイタズラするかも……

……などという考えがぐるぐると恋歌の頭の中に浮かんで消え、浮かんで消えを繰り返していた。その『イタズラ』の具体的な描

写は、はしたないので考えない。あくまでも表面上、概念上の考察だ。

「大丈夫よ」

そんな恋歌の気持ちを知ってか知らずか、優歌は肩に手を置き、優しく諭す。

「麗ちゃんは、いつだって誰かの気持ちを考えて動いていたわ。その所は、恋歌ちゃんだって分かってるでしょ？」

「……うん」

「だったら、大丈夫よ。麗ちゃんを信じなさい」

力強く優歌は言った。たまに優歌はこんな事を言ったりするのだ。そして、そんなときの優歌が言ってる事は、大体間違った事は無かった。

うん。と、恋歌は優歌に返事を返して、思った。

大丈夫。麗一はそんな奴じゃない。

……信じてみよう。麗一を。

だって、あたしは……

さて、どうしたものか……。

所変わって、ここは御咲麗一の家である。その家の中で、麗一は自分のベッドを前に立ち尽くしていた。

麗一自身も入浴を終え、明日の用意も完了、後は寝るだけだ。

しかし

今日から、寝るのは麗一だけではない。もう一人、カノンがいるのだ。

だが、麗一の家にはベッドが1つしかない。

つまり、1人は床で寝る羽目になるのだ。

「あの……私、床で寝ましようか？」

カノンは黙り込んでいる麗一に進言する。麗一は驚き、首を横に振った。

「へ？いやいやいや、そんな……」

「いいんです。私は、居候の身ですから……」

僕だつて、居候みたいなものなんだけどね。

そんな気持ちを抱きつつ、麗一はカノンに言う。

「そんな事、ないよ。僕だつて、姉さんのお荷物みたいな物なんだ。それに……」

麗一は一呼吸置いて、言った。

「それに、君みたいな女の子を床で寝かすなんて……僕は我慢ならないよ」

「……」

カノンは、顔を上げる。その瞳には、麗一の顔が映っていた。

「だから、さ、僕が今度から床で寝るから、カノンはベッドで寝ていいよ」

「……麗一さん……」

カノンの声は相変わらずの無機質だったが、その表情は心なしか悲しそうに見えた。

「……麗一さん」

「何だい？」

麗一は振り向いて、カノンに尋ねる。

「あの……それなら……」

尋ねられたカノンは、もじりもじりと身体を動かした後、麗一の度肝を抜く一言を言い放った。

「……一緒に……寝ませんか？」

時間が凍ったかに思えた。

「……え？」

麗一がその凍りついた空気に耐えられず声を発した瞬間、凍り付いていた時間は一気に沸騰を通り越して気化する。

「こ、これなら、お互いの意見が、通ると思います……」

「いやいやいやいや！それは、ちょっと……」

この娘は、今日何回ブツ飛んだ発言をしただろう。

麗一はそんな事を考えつつ、彼女の提案に否定的な意を示す。だが、彼女は言っただけだ。

「……大丈夫です。だって、麗一さん、私をどうしようかなんて、そんなこと考えていないと思いますから」

「う、うん……そりゃあ、まあ、ね」

「……なら」

「いや、でも……」

「……麗一さん」

カノンは、麗一の発言を遮る様な形で、続けて言った。

「……私、ずうずうしいお願いをして、それを受け入れてもらった拳句、ここに住まう事になってしまったんです……だから、麗一さんには極力、迷惑を駆けたくないんです」

「う……」

このぶつ飛んだ発言には、彼女なりの思いやりがあった。

それを理解した麗一は結局、押し切られるような形でカノンと一緒に寝る事になった。

彼女の出した勇気を、無下にする訳にはいかなかったからだ。

「……大丈夫？狭く、ないかい？」

2人でベッドに横になった麗一は、カノンに尋ねる。

「だ……大丈夫、です……」

心なしかうわずった声で、カノンは答える。

初対面では全く気にせずキスマまでしてきたというのに、ここ数時間で羞恥という物を覚えたようだ。麗一はまともな感覚を身に付けていたカノンに感謝に近い念を覚えた。

窓から差し込む月明かりが、部屋を照らす。その月明りでうつすらと見える天井の隅を、麗一はそれとなく眺めていた。

「……」

それきり、会話が続かない。続くものと言えば沈黙くらいだ。

……この沈黙にも、今日何回立ち会っただろうか。

「……あの、麗一さん……起きてますか？」

ふいに、カノンが話しかけた。

「……なんだい？」

麗一は態勢を変えずに、声だけで答えた。

「その……こんな事に巻き込んでしまつて、本当にごめんなさい」

「……いきなりどうしたのさ」

「……ロボットに乗って戦えだなんて、普通は引き受けないと思います。……ですが、貴方は引き受けて下さつた……。それは、嬉しいです。改めてお礼を言います……」

カノンはそこまで言うと、顔を上げて麗一を見据えた。

カノンはそこまで言うと、顔を上げて麗一を見据えた。

「……ですがこの行動は、貴方の日常生活の破滅を意味します」

カノンは会話を少し切つて、また続けた。

「……どうして麗一さんは、こんな事を引き受けたんですか？」

精一杯の謝罪と共に、麗一の選択に対する疑問を、カノンは言う。

「はは、そう考えればそうだねえ……」

それに対する麗一の第一声は、呑気な物だった。ふつと笑う麗一を見て、カノンは小首を傾げる。

「……でも、それって、僕にしかできない事なんだろう？それなら、僕がやるしかないじゃないか。それにね……」

カノンはと同じように少し会話を切つて、麗一は話した。

「僕は……生きていた証が欲しいんだ」

「……証？」

「そうさ……」

すつと、麗一の眼が細くなる。どこか、とてつもなく遠い場所を眺めているような、そんな眼だ。

「僕……そんなに目立つ方じゃない。ふつと消えてしまいそうな存在だ。いつ死んでしまつかも分からない。そして、死んだら忘れ去られてしまつ……それはちょっと、悲しいなつて」

麗一は続ける。

「だから僕は、世界に名前を残しておきたいんだ」

「それが……貴方の戦う理由……？」

カノンは、ポツリと呟いた。それに、麗一は「うん」と頷く。

単純すぎやしないか。カノンは口にくそ出さなかったがそう思った。

が、すぐに思い直す。

この麗一という男性は、一言で言えば優しい。

それ故に単純な動機で人を助けようとする。

この決断もその一環だとするならば――

「話が長くなっちゃったね。ごめん」

「いえ、話題を振ったのは私ですから……」

麗一は、1人長く語ったことを謝罪した。カノンは、構想を半ば中断させると、自分のせいでもあると言い首を横に振る。

「ふふっ、カノンは優しいんだね」

麗一はそう言つて、カノンの頭を撫でる。さらさらとした銀髪が麗一の掌をくすぐった。

こんな優しい人に、優しいと言われるなんて。

そう思ったせいもあってか、カノンはくすぐったそうにもじもじして、上目づかいで麗一を見つめた。

「……もう寝ようか。おやすみ。カノン」

「……はい、おやすみなさい……」

そう言つて、2人は横になる。もうそれ以上、喋る事は無かった。

夢を見た。

麗一は1人、道路の端に立っていた。周りには建物以外、何も無い。

目の前には、5歳程の小さい男の子が1人。

俯いていたその子に、麗一はたまらず声を掛けた。

「どつしたの？」

その子は、顔を上げる。今にも泣きだしそうな表情だ。

「……お父さんと、お母さんが……死んじゃった……」

今にも零れそうな涙を健気に堪え、男の子は答えた。

麗一は、何も言えなかった。

男の子は、言葉を繋げる。

「……でもね、僕、お友達の家は今度から住むんだ」

「良かったじゃないか」

「でも……迷惑かけちゃうから、あまり、一緒にいたくないんだ」

「そんな事、無いと思うけどなあ」

「……独りぼっちなんだ。僕は……」

その小さい男の子は、1人うずくまる。そして、さめざめと泣きだした。

「うづうづ……うづう……ひぐっ……うえええん……」

「よし、よし」

麗一は、男の子が泣き止むまで、ずっと頭をさすってあげた。

やがて泣き止んで、静かになった男の子は、麗一に礼を言う。

「……ありがとう。お兄ちゃん」

「うん。どういたしまして」

麗一はにこやかに笑って返す。再び麗一が目を開けた時、その男の子は麗一に言った。

「お兄ちゃん……僕、もう独りぼっちじゃ、無いよね？」

「うん、君には、そのお友達が付いてる。1人じゃないよ」

「ここで、ふいに後ろから、声が聞こえた。」

「おーい、麗ちゃーん」

どこかで聞いた声だ。麗一は思った。

「あ、おばさんだ！」

男の子は言う。その『おばさん』もこっちに気付いたのか、手招きして男の子を誘う。

麗一もその人を見たが、逆光で顔はよく見えない。

「お兄ちゃん、またね！」

「うん、また。会えるかどうかは分からないけど」
「会えるよ」

男の子は、笑顔で言った。その笑顔は、太陽のように眩しかった

「んん……」

麗一は目を覚ます。

なぜか不思議と懐かしさを感じさせられるような夢を見た気がした。回想にふけっていると、鼻先に何かくすぐったいものを感じた。鼻先を意識すると、途端にフローラルない匂いが麗一の鼻孔を擦る。大輪を咲かせし向日葵の花のような、そんな感じの匂いだ。下を向くと、視界が銀色に染まる。それがカノンの髪である事を理解するのに、数秒かかった。

「……うええ!？」

麗一は、素っ頓狂な声を上げる。多分、麗一が目覚めての第一声で、ここまで間抜けな声を出したのはこれが初めてだろう。

カノンの髪が下を向いたら見えた。という事は、麗一がカノンを前でしっかりと抱き留めている態勢な訳である。まだそういった類の経験が無い麗一が、驚かない訳が無い。

カノンは、まだすやすやと眠っている。

麗一は、起さないように布団から這い出て、そっと毛布を掛けてやると、そそくさと部屋を出て行った。

今日は土曜日。学校はお休みだ。

しかし、麗一の忙しい朝は変わらない。それどころか、カノンという新たな同居人も交え、一層こなす仕事が増えたようにも感じられる(というか実際増えている)。

はあ、と、肺の空気をすべて吐き出すかのような大きな溜息を吐き、麗一は逢坂家のソファへと倒れ込んだ。

順を追って彼の行動を書き連ねると、いつもの朝と同じように、

彼は顔を洗い、着替え、ゴミを集積所へ捨て、それから朝食を作り、逢坂家へ行こうとした所でカノンの存在に気付き、彼女を起こし、顔を洗わせ、替えの服を着せようとしたが無かったのでその服装のままカノンを連れて逢坂家へ行き、逢坂家で4人分の朝食を作り、優歌と恋歌を起こしに行き、朝食を始め、食べ終わった皿を洗い、カノンの着替えを受け取り、カノンを着替えさせて今に至るわけなのだが――

疲れた。

今の彼の心の中を満たす、たった1つの感情だ。

「そうですか……」

カノンはそう言うと、麗一の隣へと座る。

「あの麺類、確かカルボナーラ、と言いましたね。とても美味しかったですよ」

「それは良かったよ」

「ふふっ……」

ふっと、カノンが笑う。優歌の笑顔のよつそのその笑みに、麗一は気圧されかける。

……笑顔の似合う女性って、不思議な力でもあるんだろうか。

麗一は真剣にそう思った。

「麗一イー!!」

丁度その時、リビングでくつろいでいた恋歌が、大声で麗一を呼ぶ。

「どっしたの!?!」

「……麗一……アレ……」

何事かと思い、麗一が恋歌の所まで行くと、恋歌はテレビを指差して口をパクパクさせていた。

麗一は、恋歌の指差したテレビの内容を見る。

『……繰り返しお伝え致します。小笠原諸島を突如包み込んだ光について速報が入ってきました。繰り返しします……』

このキャスターの一言に、麗一は背筋に氷柱が打ち込まれたかの

ような、冷たい感覚を覚えた。

「カ、カノン！これって……！」

「はい。……まさか、もう来るとは……」

カノンが言った、異世界の侵略者は、もうこの世界を攻撃してきたのだ。現状を把握しつつ、麗一はニュースを見続ける。

「……新たな情報が入って参りました。光線としか表現できない光の放出によって、小笠原諸島のほぼ全域は壊滅状態になったようです。現在、国会は臨時集会を開き、この未曾有の事態にどう対応するのか、検討を……」

「……この国の政府は、比較的早めな対応ですね」

「で、でも、太刀打ちできないんでしょ!？」

カノンの冷めた反応に、恋歌が興奮した様子で問う。

「はい。そうです」

「じ、じゃあ、今すぐ行かないといけないんじゃない？」

「当たり前です」

麗一の問いに返答した後、カノンは麗一に向き直す。

そして、呟いた。

「麗一さん……覚悟の程は」

「……それは、怖いさ。できれば戦いたくない……だけど、僕がやらなきゃ、皆……無くなってしまうんだろっ？なら、やってやる」

麗一は拳を握りしめ、続けて言った。

「……僕の気持ちは、変わってないよ」

「分かりました。……それでは、行きましょう」

麗一の度胸を試した後、カノンは麗一に手を差し出す。

「麗一さん、手を握って下さい。ワープしますので」

「え?……あ、うん。……分かった」

麗一は、覚悟を決めるかのように深呼吸した後、カノンの手を握った。その直後、2人の身体が光に包まれ始める。

「……恋歌」

「ふえっ!?!……何?」

もう、その身体の半分は光に包まれて、見えなくなっている麗一が、恋歌に話しかけた。恋歌は、物怖じしつつも問い掛けに反応する。

「姉さんに、行ってくるって伝えといて」

「……うん、分かった」

「……じゃあ」

「あ、待って、麗一！」

2人の体が透け始めた。恋歌は焦りの余り早口になりながらも、麗一に一言告げた。

「……絶対に、帰って来なさいよね」

麗一には、絶対死んでほしくない。だが、面と向かって言うのは恥ずかしい。そんな恋歌が出した、精一杯のエールだった。

麗一は、恋歌が自分の身を案ずる発言をした事に驚きつつも、ふっとはにかんで恋歌に言葉を返した。

「……うん。約束する」

麗一が恋歌にそう告げた直後、一際強く麗一とカノンの身体が光ったかと思っただ次の瞬間、2人は消えていた。

ポツンと1人、さつきまで3人いた部屋に、恋歌のみが残された。

「……もう、麗一ったら……」

さっきの、ほんの一瞬のはにかんだ顔。その顔が恋歌の目に焼き付いて離れない。

……麗一は、大丈夫なんだろうか。

いや、麗一は必ず、帰ってくる筈。

なんたって、あいつは約束を破れない奴だから。

「……何たって、あたしが約束したんだからね」

胸に手を当て、恋歌は、大切な人のために武運を祈った。

麗一は、光に飲み込まれてから、真っ黒な空間に出た。

「……カノン、ここはどこだい？」

「……ゼロにして無限の空間……といった所でしょいか」

会話をする麗一とカノンの身体は、空中に浮いていた……否、空中に立っていた。

まるでそこが地面であるかのように、空中を歩いていた。麗一は、違和感を感じつつも麗一はカノンに付いて行く。そうして歩いて行くうちに、前方に巨大な何かが見え始めた。

「……………なっ！！」

思わず、麗一は叫びそうになった。何とかして言葉を飲み込むも、その驚きは隠せなかった。

50mはあるであろうその機体は、他に何も無い空間に微動だにせず存在した。

目も鼻も口も無い、のっぺらぼうのような、無機質な頭部のデザイン。しかしながら圧倒的な存在感があった。

周りは黒いというのに、これは白と銀の塗装（若干黒いラインもある）である。そのせいもあってか、目移りしそうな迫力だった。

心臓を掴まれるような圧迫感を覚え、麗一は見入った。

「これが、私と麗一さんの機体……名を『アヴソリユート』と言います」

「アヴソリユート……『絶対』か」

麗一の言葉に、カノンはその名の通りの絶対的な力があると言う。

「この機体は、次元構造に干渉し、空間を操る機能があります。正式名称は、『次元境界干渉装置』です。私たちは短縮して『Dシステム』なんて洒落た名前で呼んでいます」

「そっか……凄いんだな」

麗一はカノンの説明を聞いて、その科学力に感心していた。

自分たちの世界では、まだ等身大のロボットの2足歩行すらおぼつかないというのに、こんな大きいロボットを造ってしまえるなんて麗一が感心している間も、カノンの説明は続く。

「この機体の間接部位には、電圧によって硬度が変化する液体、『電磁流体』が使われています。それによって、この重量でありながらも滑らかな動きが可能となっています。」

「……」
「さらに、攻撃兵装には物質とは正反対の物質……『反物質』^{アンチ・マター}を使用しています。これは、物質とぶつかれば、その物質を中和、存在を消滅させてしまいます。……鹿児島県北部を壊滅させたのは、恐らくこの原理を使用した広域破壊兵器の仕業でしょう。」

「反物質……」

そんな物を使ってまで、地球を侵略したいのか。

麗一は、心のどこかでカノンの仲間に対する嫌悪感を抱いた。

「……この機体にも、反物質による攻撃兵装が取り付けられています。下部に近接エッジを取り付けた『反物質砲』^{アンチ・マター・ランチャー}が腕部にそれぞれ2丁ずつと、大出力で敵機体を無力化し、広範囲の破壊も可能な『大出力反物質砲』^{アンチ・マター・カノン}が1門、兵装として装備してあります。そして、背部にはこれらの武器の反動を相殺する高出力のプラスター・ユニットが備え付けられています。機体の稼働エネルギーは、外部の大気を機体内部に取り入れ、物質元素の改変作業をしてエネルギーに変換します。ですので、事実上エネルギーは無量大です」

「……」

「……どうかしました？」

ぼかんとした表情で絶句している麗一に、カノンが話しかける。

「……あ、いや……考えていた『機体』^{アンチ・マター・ランチャー}ってというのが、そこまで凄いととは思わなくてさ……」

麗一は、素直に思っている事を口にした。稼働エネルギーは無量大、武器は物質を消滅させる使用、50mはあるうその巨体――

――
全ての面において、麗一の想像を上回っていた。

「……麗一さん、私たちの科学力、侮ってもらっては困ります」

「ま、そうだよね……世界超えられるもんね……」

麗一は、頭をポリポリと搔いて、肯定した。

「……さて、もう無駄話をしている時間はありませんね。そろそろ乗りましょう」

「……分かった。……さて、遂にこの時が来ちゃったか……って、あ！カ、カノン！」

「どうしました？」

ここにきて、麗一は大変な事に気付いた。飛んできたカノンに、麗一は言う。

「……操縦方法、知らないんだけど……」

「ああ……」

カノンは、麗一と比べると殆ど、いや、全くもって驚いていなかった。余裕の表情を持って、麗一に言う。

「それでしたら、問題ありません。私の方から麗一さんの脳に直接操縦マニュアルを植え付けておきますので」

「……あ、そうなの」

焦りながらカノンを呼んだ自分が急に愚かしく思えた。

……全く、無知ってというのは、時として災難だよな……。

ソクラテスという大昔の学者の言葉に、『無知は罪である』という物があるのをふと思いついた。が、今は考える必要はないだろう。麗一はカノンのいう事に耳を傾けた。

「ちよつと待って下さい……現在、麗一さんの搭乗席のロックを外しています」

程無くして、2人の乗る機体『アヴソリユート』の胸部あたりから、バシユツ、という音と共が聞こえた。

「麗一さんの搭乗口は、機体胸部に内蔵されている球体です。私は、頭部の方の制御用搭乗口へワープされますので、ここでお別れです」

「え！？嘘でしょ！？僕1人かい！？」

「いえ、通信はできますから、アドバイスは私の方から出します。安心して下さい」

「あ、そうなんだ……」

話している2人の身体が、光に包まれる。空間転移の前兆だ。「アヴソリユートが呼んでる」と、カノンがポツリと呟いた。

「……それでは麗一さん、ご武運を」

「うん。一緒に頑張ろう、カノン」

「はい……」

そう言つて、二人は別々の所へと飛ばされる。

「……ハッ」

気付けば、麗一は機体の胸部にいた。

ここだけでもかなり広い。バスケットの試合ぐらいはできるのではなかるうか。それぐらいの広さだった。

後ろを向いてみると、下に穴が開いていて、どうやらそこが入口らしい。

「……何か、本格的なコックピットって感じがするなあ……」

中をのぞいた麗一は、そう呟いていた。

ゲームセンターなどに置かれている戦闘機のセットなどとは全く違う、本格的な機器が備え付けられている。麗一はゴクリと喉を鳴らした。

中に入り、シートに腰掛け、丁度手を置く位置にあった、拳銃の持ち手のようなグリップを握る。

その時、キーンとした感じの音が脳に響き始めた。それと同時に、脳に届くこそばゆい感覚。例えるならば、何かが流れ込んで来るかのような感じだ。

あ、そう言えばカノンが言つてたな、脳に直接操縦マニュアルを送るとかなんとか。

しばらくして、脳に来る、流れるような感覚は途切れた。その頃には、もう麗一は機体の使い方が手に取るように解かるようになっていた。

麗一は、覚えたての知識で機体の状態を確認する。

「うん、各部正常、つと……」

一通りの機体の点検が終わった所で、通信回線が開かれた。カノンからだ。

「麗一さん、点検ご苦労様です。これから、敵機体出現位置の小笠原諸島へと機体を転送します。……大丈夫かと思いますが、気分が

悪くなつたら言つてください。稼働を中止しますので……』

「うん、分かったよ。……行こう。カノン」

『……はい』

次の瞬間、周りの空間を巻き込んで、2人を乗せた白銀の巨人は姿を消した。

残ったのは、黒い空間。それのみである――

3

その頃、小笠原諸島。

そこには、建物があった。森があった。山があった。そして、何よりも人がいた。

今は、何も無い。

まるで、その空間ごと齧り取られたかのように抉られている。

今から数十分前の事だ。

その上空に、オレンジ色の人型の起動兵器が突如出現。

その機体から放出された、眩いばかりの光の奔流。

これによつて、かつてそこにあったものは、全て消えた。

町も、山も、人も、何もかも。残ったものは、その機体自身と、隕石でも落下したかのような巨大なクレーターのみだ。

そして、現在――

「……………」

小笠原諸島の大地に立つ、人型の起動兵器。

鮮やかなオレンジ色のその機体は、何も無い大地に咲く、鋼鉄の花の様であった。

その頭部。バイザーのような部分の奥に、1人の女性が跪いている。機体と同じような鮮やかな色の髪を持っているその女性は、精神

統一をしているのか、跪いたままピクリともしない。だが、起動兵器の瞳の部分から見える景色を凜とした目線で見つめている。

「……………」
終始無言だ。

しかし、何も感じていない訳では無い。その瞳は、好戦的な輝きを湛えていて、獲物を今か今かと待ち構えているような、期待感や凜猛な眼差しを孕んでいた。

ふいに、その女性の周りに、接近警報と書かれた、空間投影式パネルの表示が出る。

遂に来たか。とでも言わんばかりの勢いで、その女性は顔を上げる。

だが、データを更新してみれば、それはただの戦闘機だった。

女性は、溜息を吐き出す。どうやらお目当ての物では無かったようだ。

しかし彼女は、もうすぐこの星に降りたつて8分が経つ。ちょうど退屈だと感じていたようだ。

「……少し、遊ばせてもらおうか」

そう呟くと、彼女は機体に命令を送る。

精神と機体をシンク口させているので、考えるだけで機体は動く。彼女の脳から発信された微弱な電波は、増幅されて、最終的に電磁流体に命令として送り込まれる。

それまで機体を支えるだけだったどす黒く固まったその流体は、電波が流れただけで、生き生きと命令通りに動き出す。

その機体は、空を飛び回る物——日本から、アメリカ経由で命令を受けた、日本に駐留していたアメリカ軍の戦闘機に、踊るように襲いかかった。

「00から各機へ告ぐ、敵のデカ物が跳躍した！そのまま我々の編成のシッポを追いかけてきているぞ！最後尾の08、詳細を報告せ

よー」

『こちら08！まこうにも追い付いてきやがります！各機散開を許可します！繰り返します！各機散開を—— うつつ！！がああああ……』

「08ツ！応答せよ！！08イツツ！！！」

『07から00へ、08の撃墜を確認！繰り返す！08の……』

コールナンバー07が、隊長の00へ、最後尾の撃墜を報告する。その報告の途中で、通信が途絶えた。

「……00から各機へ、旋回する」

そう00が告げた後、戦闘機軍は綺麗にターンした。下を眺めた00は、地面へと撃墜する07の機体を眼下に捉えた。

『……03より00へ、07の撃墜を確認』

「00より全機へ、こちら07の撃墜を確認した……」

そう告げると、未だに最後尾の機体を追いかける、オレンジ色の巨人を忌々しそうに睨みつける。

政府からの出撃の命令で出撃したこの小隊だが、全員が全員、状況を全く掴めないでいた。

【小笠原諸島が閃光に包まれた。状況を確認し敵影が見えた場合、爆撃を許可する。】

これが与えられた命令だが、敵影が真後ろでは、爆撃もあったものではない。というか、そもそも命令自体がどこかしらおかしいのだ。しかし、一介の軍兵に、作戦の立案理由やその背景が伝えられる事などはまず無い。そのような扱いには慣れていて、小隊全員は、敢えて口には出さなかった。

そのため、隊長をはじめこの小隊は、必然的に自分たちの頭で理由を考える事になる。

……あれは、一体何なんだ？

隊長がそう考える間にも、通信機からはノイズ交じりの悲痛な叫びが聞こえてくる。

戦闘機の羽を、巨人が思い切り殴りつけたのだ。

「つくうつくう!?」

片翼を失った戦闘機は地面に急降下する。人体には過酷すぎるGに見舞われて、隊長はどす黒い血を吐き出した。

「……イ……エス……キリ……ス……ト……」

喋るのも苦しい筈なのに、隊長は神の名前を呟く。そして、身体の前へ手で十字架を作り、最期の望みを呟いた。

「……オ……オレ……を……天、国……ま、で……」

隊長が喋り終わり、目を瞑る。その直後、戦闘機は地面に叩きつけられて大破、炎上した。

その原形を留めていない戦闘機の上に、オレンジ色の巨人の足が乗る。ぐしゃり、と、スクラップになった戦闘機は情けない音を立てた。

「……この程度か」

暇潰しにすらならなかったのだろう。機体の搭乗者である女性は、鮮やかな髪をかき上げて、不満そうに息を漏らした。

その時、空間投影式パネルが何枚も彼女の周りに展開された。

内容は、300m先に空間構造の変異を確認した。という物だった。

そのの意味するものとはというと。

「……来た」

彼女は、にやりと口元を歪ませると、そう言った。

小笠原諸島の空が、バチバチと音を立てて歪む。

景色は曲がり、黒くなってゆく。

やがて、黒い球体のような物体が、空へと現れた。

その球体は、内側から弾けた。

その中から、翼のようなユニットを広げた、白銀はくぎんの巨人が現れる。

先ほどの空間の歪みによってできた黒い球体とは、まるで正反対の色合いだ。

『……機体の転送、完了しました』

「ありがとう、カノン」

麗一はカノンに礼を告げた後、周りを見渡す。

「……これは、酷い……」

口から自然と感想が出た。

かつて、ここには建物があり、自然があり、人が生活していた。世に言う、『日常』という物がそこにあっただろう。

今あるのは、黄土色の抉れた大地だけだ。そこにあっただもの、全てが消えた。そういう事なのだろう。

『……これは、反物質攻撃の仕業です……』

通信機越しに、カノンの悲痛な声が届いた。

麗一は怒りと言うよりも、哀しみを感じた。

全てを消し去ったの侵略。この光景は、かつて、日本に落ちた原子爆弾を連想させた。

あれのおかげで、広島と長崎は廃墟と化した。

しかし、ここには廃墟すら無い（……）。

これが、反物質の力。ここに来る前、カノンが説明したそれがどれほど悍ましい物なのか、麗一は肌で感じた。

感傷にふけっていると、突然、数枚の空間投影式パネルが麗一に周りに展開される。いきなりだったので、麗一はびっくりした。気持ち落ち着かせると、麗一は更新されたデータに目をやる。

内容は、300m先に機体反応。

なるほど、つまり、300m先に――

「……つて、ええ!？」

やって来たばかりだというのに、もう敵と会うのか!？

麗一は、驚きを隠せないでいた。

『麗一さん……』

「うん……解かってる」

麗一は、前を向き直す。そこには、燃え盛る残骸から出る煙を背に、こちらを見据える鮮やかなオレンジ色の機体があった。

……綺麗だ。

麗一はそう思った。とても戦うための物とは思えない。中世ヨーロッパの館に飾られている、西洋甲冑を思わせられた。

『………橙色の『ヴァルキリー』と言う事は………』

カノンが、何か言いかけて、黙る。『ヴァルキリー』とは、相手が乗って来る機体の名前だそうだ。ここに転送される最中、カノンから聞いた。

それにしても、カノンの言いかけた事が気になる。麗一は通信をして、どうしたのか聞こうとした。

その途端、通信の回線が開かれた。カノンかな。と、思ったが違う。これは外部からのアクセスだ。つまり――

『………私だ』

あの機体からの通信だ。音声と共に、搭乗者の顔も映し出される。そこには、カノンに似ているような、似ていないような、そんな顔を持つ人がいた。だけど、髪の色だけはカノンと全く異なっていた。『………アランシア………』

カノンは、女性に向かって呟いた。どうやら、それが彼女の名前らしい。

『そのこの男………貴様は誰だ？』

「えー!？」

麗一は、敵機の搭乗者である女性――アランシアに急に話しかけられて、動揺した。

『?………何を怯えている、私は貴様に自己紹介を求めているだけだぞ?』

「え?ああ、ぼ、僕は………御咲麗一」

『ふん、そうか………貴様が主の………』

『アランシア、単刀直入に聞きますが………何が目的です?』

アランシアが何かを言おうとしたが、カノンの言葉で遮られた。アランシアは、カノンの説明に答える。

『目的だと?………ふっ、笑わせるな。貴様自身もよく分かっている

だろう。その機体、アヴソリユートを返してもらおう』

『お断りです』

もの凄いハッキリと断った。このカノンの強気な態度に、麗一は驚いた。

『……今から戻れば、主もお許しになるう。……早く機体から降りて、投降しろ』

カノンの反論に、アランシアの台詞の語尾が凍て付く。

『……嫌だ、と言ったら……？』

カノンは、さらに挑発をするかのような発言を続ける。これを見たアランシアは、大きな溜息を吐いた後、小さくかぶりを振った。

『そう言うならば、それは勿論——』
すう、と、息を吸った後、アランシアは言い放った。

『貴様等を殺してでも、ミッシヨンを達成する』

刹那、麗一は凍て付いた殺気が背中を撫でるのを感じた。

ぞわぞわと、気味の悪い感触。背筋が震える。

『……交渉は決裂ですね』

『ああ、そのようだな。では……お手合わせ願おうか』

そう言うと、アランシアの方から回線を切られた。それと同時に、彼女の機体、オレンジの『ヴァルキリー』が動き出す。

『来ます、麗一さん』

「わ、分かってるさ！」

相手は、両刃の近接ナイフを抜いて急接近してきた。麗一は、反物質砲に取り付けられた近接エッジで対抗する。

ガキン、と、鋼鉄がぶつかる音が空に響き渡る。

こうして、2機の戦闘は始まった。

「くっ……」

数十分戦闘が続けられていた。

オレンジのヴァルキリーを駆る女性、アランシアが呻く。

白銀の機体——アヴソリユートは、近距離射撃戦闘を重視

した兵装をしている。

それならば、射撃の隙を与えず急接近し、格闘戦で行動不能にする。彼女はそう考え、機体を動かしている。

だが、間合いを詰めようにも、詰める事ができない。

理由は単純明快。

ディメンション
「Dシステム……」

呟いたアランシアは苛立ちを覚えつつも、間合いを詰めるべく、再度急接近を試みる。

アヴソリユートに乗っているのは素人だ。操縦の方法ならカノンの事だからどうにか教え込んだのだろう。しかし、経験が足りない。ヴァルキリーは、あつという間に間合いを詰める。

そのままアランシアは、ヴァルキリーの刃渡り10mのナイフをアヴソリユートの腹部に突き刺そうとする。しかしその刹那、アヴソリユートが消えた。

「くっ……」

何度失敗しただろうか。本日何度目かも分からない索敵をする。

結果、500m先に機体反応。

彼女は、ヴァルキリーを振り向かせる。動作が終了した時、機体の周りに反物質砲が撃ち込まれた。

「クソッ」

彼女は素早く機体に命令を送り、反物質で構築された砲弾を回避する。

この砲弾は厄介だ。どんなに頑丈な物質でも、当たれば塵どころか、原子すら残さずに消し飛ばしてしまう。回避の際は、ミスは許されない。まさに極限の状態だ。

だが、そんな状態に置かれていても、アランシアの判断は曇らない。瞬間加速を用いた再度の急接近を試みる。

今度は横から攻め入り、ナイフによる切り上げを試みたのだが、またしても失敗。アヴソリユートはまたも機体を転送し、距離を取った。

アランシアは軽く舌打ちしてから索敵し、結果を見る。

結果、600m先。ヴァルキリーは振り向く。その先には白銀の機体があった。後ろからの逆光で、アヴソリユートが神々しく見える。

思うように攻められない。彼女は苛立ちを隠せないでいた。

だが、彼女はそれとはまた別の感情も抱いていた。戦闘を続けるにあたっての、うしろめたい気持ちだが、そこにあった。

「……カノンめ、無茶をする……」

アランシアは呟く。それは、言葉通りの意味。

だが、回想に耽っている暇は無い。急接近が駄目なら、別の戦略を立てるしかない。アランシアは考える。

その間にも、アヴソリユートからの砲撃。

アランシアは冷静に状況を分析し、ヴァルキリーを動かす。砲弾を回避、成功。

砲弾を回避したその後、アランシアはある戦略を思いつく。これならば、いけるかもしれない。アランシアはにっと笑った。

『はあ……はあ……はあ……』

通信機越しに、カノンが息を弾ませる。麗一はそれに気づき、カノンに声を掛ける。

「カノン、どうかしたの!？」

『い、いえ……大丈夫、です……』

全然、大丈夫じゃなさそうだ。

「カノン……」

『私には構わずに……大丈夫ですから』

「そ、そうかい……」

これ以上話すと、敵の行動の対処ができなさそうだ。麗一は前へ向き直ろうとした。

その直後、鉄が地面に叩きつけられる音。麗一は何事かと急いで前を向いた。

見えた物は、相手のヴァルキリーが両刃のナイフを捨てる光景だった。

そして、高性能センサーが拾った、敵機から発せられる、ガチャリガチャリと機械の駆動するような音。何事か、と麗一は眺める。ヴァルキリーの背中に装備してあった何かの機械が動き出す。その何かが、巨大な太刀であるという事を理解するのに、数秒かかった。

最終的に腰元まで移動したそれを、オレンジの巨人はゆっくりと鞘から引き抜いた。

自身の機体の全長の半分程はあるであろう大太刀を、ヴァルキリーは悠々と構える。

その大太刀の鞘が、再びヴァルキリーの背中まで移動した直後、オレンジ色の巨人は、瞬間加速でアヴソリユートに詰め寄った。

「なっ！？危ない！！」

麗一はとっさの判断でブースターを稼働させ、その場から遠のいた。

着地したアヴソリユートを建て直し、麗一はヴァルキリーを見る。

「！？」

麗一は目を見張った。

敵機の背中に装備されていたのは、太刀だけではなかった。ガシヤン、と音を立て両肩から現れた、妙に太く、長い銃口。それが、こちらに向けられていた。

「……いけません、あれは、広域破壊——」

カノンが説明しかけたその刹那、アヴソリユートは光芒に飲み込まれた。

小笠原諸島の、その大半を消し飛ばした反物質式広域破壊兵器。再び放たれたその一撃は、情け容赦無く再び大地を抉り始める。

相手の機体が転送され、距離を取った所を広域破壊兵器で足止め

する。

これが、アラংশアの考え付いた新たな戦術だった。

だが、アラংশアに与えられている任務は、『アヴソリユートとカノン・ブレスタの奪還』である。

そして、反物質は、生命の有無にかかわらず、触れた物体を消し去ってしまう。

そんなものを叩き込んだら、機体は原形を留めてないのでは？アラংশアは立案の際、一考した。

だが、あちらは『Dシステム』を持っている。この一撃を防ぐ、もとい、弱体化させる事など簡単だろう。

そう思い、実行に移したのだが。

「……………」

目の前で起こっている、この光——反物質の大爆発。これを見ていると、本当に大

丈夫なのだろうか、不安を掻きたてられる。

もし消えてしまったら、『あの方』は怒るだろうか。

アラংশアは考える。

…………カノン。

最も、あの方に愛されていた。

だが、逃げ出した。

主は、苦しんでおられた。

なぜだ。

なぜ…………？

……………？

私は、カノンに…………嫉妬しているのか？

自分でも、解からない。

彼女の胸の内に、淀んだ何かが溜まる。

気持ちが悪い。アラংশアはそう思った。誰か、この心に溜まっ

た何かを吐き出させてくれ。

その時、ピーツ、というけたたましい音が鳴り響いた。いや、気付く前から鳴っていたのかも知れないが、今は置いておく。アランシアはパネルを見た。

「!!!?」

展開された空中投影式パネルには、『敵影接近』と書いてある。

前を向くとそこには、爆発している反物質をかき分け、銃剣を解放して突撃してくるアヴソリユートの姿があった。

完全に油断した。

いや、それよりも。

あの威力の一撃が、足止めにすらなっていない!?

アランシアは驚愕の余り、機体を動かすのを忘れていた。

戦場では、私情に流されず、気を抜かず、冷静でいなくてはならない。それができなければ――

死ぬだけだ。

アランシアは、はっと我に返り機体を動かそうとしたが、遅かった。

ドシュツ、という生々しい音。腹部の電磁流体が、アヴソリユートの銃剣の近接エッジが突き刺さっていた。

それだけなら、まだ良かったのかもしれない。

銃剣のエッジが刺さっている。その意味する者とは、つまり――

ズドン、と、妙に小気味の良い音が耳に伝わった。

反物質砲による零距离射撃。

銃口がピタリと隣接しているため、回避は不可能。最良の選択だ――

アランシアは心の中で呻いた。

反物質砲の零距离射撃は強力だった。胴体を吹き飛ばされたヴァルキリーは、胸部から上が千切れ飛び、宙を舞う。

地面に残されたヴァルキリーの下半身からは、どす黒い電磁流体がブシャツと噴き出し、やがて残留した電流では形状を保てなくなったのか、瓦解した。

吹き飛ばされた胸部から上はというと、くるくると宙を舞い、地面に叩き付けられた。

「きゃあああああー!」

中に乗っているアランシアは、叩き付けられた際の衝撃で悲鳴を上げた。

「ぐっ……ぐっ……つつ……」

アランシアは、呻きながら体勢を立て直す。その際に走る激痛。脇腹がぬめつとして、血生臭い。どこかしらにぶつけたのだろうか。額からも血が出ていた。

ヴィン、と、アヴソリユートから通信回線が繋がった。アランシアは、もはや執念のみで身体を動かさし、通信に応答した。

「……ん……な、なん、だ……」

「え、わっ……だ、大丈夫……ですか？」

通信に応答したアランシアを見て、麗一は小さい悲鳴を上げた。

「……ふ、呆れる……な……自分で、やっておいて……大丈夫か、などとは……」

「あ、あの……」

全くもって笑えないジョークを返されて、麗一は困惑した。

それは、大丈夫には見えないけど……。

これは、僕が……僕がやってしまったんだよな……。

額から血を流して応答をする彼女を見て、麗一は自己嫌悪に走った。

「……カノン……なんだ? どうせ、お前が、回線を、開い……たんだ、ろ?」

息も絶え絶え、アランシアはカノンに話しかける。

「……はい」

カノンも、かつての仲間が血みどろになって悲しみを覚えたのか、心なしか声が小さいようにも聞こえた。

『……死に間際の言葉くらいは、取って置こうと思ひまして』

『ふん……そう、か……』

カノンの問いに、吐血しながらもアランシアは苦笑する。

『死に間際の、言葉か……特に無いな』

『そう、ですか……』

カノンは、アランシアのそっけない返事に返した後、麗一にこう言った。

『麗一さん……彼女の機体に大出力反物質砲を』

『えっ……？』

麗一は驚いた。

大出力反物質砲を撃て、という事はすなわち、アランシアを消滅させると言っているのと同義だ。情け深い麗一だからこそ、戸惑った。

「な、何も、そこまでしなくたって……」

『いいや……するんだ……』

麗一の言葉に口を挟んだのは、以外にもアランシアだった。

「え、ちょ……どうしてですか！あなたの事なのに……」

『だからこそ、だ……』

声を荒げた麗一の講義に、アランシアは口を挟む。

その直後、アランシアは吐血した。どす黒い血が、アランシアの口から吐き出される。

「……うっ……」

麗一は、思わず顔を背けた。

『……なぜ消さねばならないのか、簡単に説明します』

カノンは、喋れないアランシアに代わって説明を始めた。

『私たちの兵器は、麗一さんも知っての通り、この世界の科学の何十年かは先の代物です。そんなものを残しておけば、どうなるか解かりますね？』

「……いつかは見つかるよ」

『はい、そうです。それによって、この世界の科学は著しく発展するでしょう……』

「そのどこが悪いのさ……」

『……様々な世界がある。という事は、この世界と何らかの密接な関係がある世界が存在するという事も否定できません。『密接に繋がっている世界』は、2つとも進み具合が均等です。どちらかの世界の科学や歴史などが飛び抜けているなどという事は、有り得ません。……ですが、もしも、外部からの接触によって、片方の世界の何か著しく変化してしまった場合……どうなると思いますか？』

「えっ……」

麗一は、急な質問に戸惑った。すぐさま、カノンの問いかけを考える。

「……？……分からない……」

『……正解は、『両方の世界とも消滅する』だ……』

「って、アランシアさん!？」

思わぬ方から回答が来た。麗一は仰天する。

『……彼女の言う通りです』

「だから……だから……」

麗一は息を飲み込んでから、叫ぶ。

「僕には、人を殺せないよ!！」

麗一は半泣き状態だった。

それは仕方が無い。純粹無垢な人間が、人を殺せと言われたらこうなるだろう。

だが、アランシアはそんな麗一に、きつい発言を浴びせる。

『……ふん、アマちゃんだな……』

「何……だって……?」

『その優しさが……時に人を傷つけるのだ……!』

「え……」

麗一は驚いた。アランシアが泣いていたのだ。

はつと、麗一は気付いた。

彼女は、僕を馬鹿にするために言っているんじゃない。

『私は……のこのことあそこには戻れん……皆に顔見せできないかな……負け犬として生きるよりは、ここで散った方が良い……！』
自分自身のために言っているんだ！

『さあ、少年……早く、私を消せっ！……ぐふうウっ……！！』

アランシアは、またも吐血する。

ここで助けた所で、何かしらの治療をしても手遅れだと、目に見えて分かった。

『……麗一さん』

カノンからの通信。彼女は、分かり易い一言を呟いた。

『……早く、楽にしてあげて下さい……』

「……うっ」

『……がはっ……早く、しろオツ！！』

『麗一さん……』

「うっ……うっ……うっ……」

麗一は、泣いていた。

余りの哀しさに、知らずのうちに涙がぼろぼろと溢れてくる。

「アランシア、さん……」

『泣くな、男だろ？……ぐっ……なんだ？』

麗一は、詰まりそうになりながらも、一言告げた。

「……ごめんなさい」

『……発射準備、完了です。トリガーをどうぞ』

カノンが、頃合を見計らって麗一に告げた。麗一は涙を拭いっつ軽く頷く。

『……カノン、私は……先に、逝って、くる……いつか会おう』

『……死に間際の言葉、あつたじゃないですか』

『ふっ……そうだな。……さあ、少年、早く、私を……楽に……』

アランシアは、呼吸もできなくなっていた。息も絶え絶え、麗一に言う。

「ごめんなさい……」

麗一は、涙を溢しながらそう呟いた後、トリガーを引き絞った。

「麗ちゃん、遅いなあ……」

洋菓子店 rainbow。その運営者にして現役看板娘の優歌は、退屈そうに溜息を吐き出した。

市役所に行つて来た理由。それは、カノンの住民票を提出しに行つたのだ。

優歌の嫌いな、長つたるくて堅苦しい手続きも済ませ、晴れてカノンは正式な一家の一員になったのだ。

優歌本人が話したので、恋歌は既に知っている。

早く麗一にも教えてあげたい。優歌はそう思って待っているのだが。

「……はあ」

なかなか帰つて来ない。客もいないので、はつきり言つて暇なのだ。

……ゲームでもしちゃおっかな。

優歌はそう思い、携帯ゲーム機を取り出そうと自分のポケットに指を忍ばせた。麗一の「ダメですよ、勤務中は」という声が聞こえてきそうだった。

その時、店内にカランカランと小気味の良い音が響く。ドアに取り付けた鈴が鳴つたのだ。すなわち、お客が来たという事になる。

「あつ、いらつしやいませ」

営業スマイルでもこうはいかない、とびっきりの笑顔で優歌はお客をもてなす。

「……………」

来た客は、扉を丁寧にしめると、カウンターに寄つてきて、並べられているケーキを眺める。

客は男だ。180cm以上はあろうその全身を、上下ともに真っ黒な、ぶかっとした服で包んでいて、それがとても様になっていた。

優歌はその男の表情を窺ったが、深くフードをかぶっているのだからなかった。

その男は、1分ほどケーキの棚を凝視した後、優歌に話しかけた。

「あの……この苺のショートケーキを1ホール欲しいんだが……」

「あ、はい。かしこまりました。2000円になります」

「2000円か、分かった……」

そう言っつてその男は、ポケットから1枚の黒いカードを取り出して、優歌に渡す。

「クレジットですね。しばらくお待ちください。……はい、

どうぞ！お気をつけてお持ち帰りください」

心から楽しんでる様子で接客をする優歌。男は、その手から差し出されたケーキの箱を優しく受け取ると、フードを取った。

「あつ……」

優歌は、つい声を出してしまった。

そこには、とても優しくそうな、かつ凛々しい顔があった。今テレビでやってる話題の俳優よりもイケメンである。

優歌は、自分が赤面しているのがはっきり分かった。

「……………」

黒い男は、優歌の手を優しく取った。

包み込むような男の手の温もりが、優歌に伝わる。その温もりに酔いしれたかのように、優歌はポーツとしてしまった。

優歌の心臓が、ドキドキと早鐘のように動いている。

このままじゃ壊れちゃいそう。優歌はそう思った。

その感覚の中で、優歌の脳になぜか麗一が思い浮かんだ。

……………なぜだろう。

似ている、と言われれば似ているかもしれない。優歌は再び男の表情を見てそう思った。

でも、どうして。全く同じって訳ではないのに。優歌は少なからず混乱していた。

「……………」

男は、優歌の手を何も言わずに、しかし名残惜しそうに離すと、店のドアへとひるがえす。

カランカラン、と扉に付けられていた鈴が鳴る。

その扉から出て行くこととした男は、ふと、何か思い出したかのようになり向いて、こう言った。

「……………また来ます」

カランカラン。

男が扉を閉め、出て行った時の鈴の音が、妙に耳に残った。

まるで、これから訪れるであろう幸福を知らせる福音のようだ。

4

「……………ここは……………?」

転移してきた麗一は、カノンに場所を尋ねた。

「……………麗一さんのお家の、すぐ近くかと……………」

そこまで言って、カノンは態勢を崩す。

「カノン!?大丈夫!?!」

「くっ……………す、すみません……………」

かなり苦しそうだ。麗一は彼女を抱え上げた。

「……………やはり、使い過ぎてしまいましたか……………」

「え?」

その際に、カノンがポツリともらした一言を、麗一は聞き逃さなかつた。

「……………カノン、使い過ぎたって、何の事?」

「え?……………いえ、何でもありません。」

「……………もしかして、Dシステムの事……………?」

「う……………」

どうやら凶星のようだ。

「もしかして、アレを使い過ぎたら、カノンはこうなっちゃうの？」
「……………」

カノンは答えない。それは、麗一に黙っていた罪悪感からか、それとも、ただ単に触れられたくない話なのか。麗一は分からなかった。

「……………ごめんね、カノン」

「え……………」

麗一に謝られて、カノンは驚いた。

「こうなるの、知らなくて……………僕、かなりソレに頼ってたんだよ……………無理させてたんだね……………僕が、もっと上手に戦えてたら……………ごめん、カノン」

「い、いえ……………私がきちんと言っていなかったただけですから……………」

カノンは、麗一の非を否定した。

少し置いて、カノンは語りだした。

「……………麗一さんの言うとおり、Dシステムを稼働させすぎると、私に負担がかかるんです」

「……………どうして？」

「それは……………」

カノンは一瞬、話すべきか戸惑い、顔を伏せた。だが、すぐに顔を上げた。

決意に満ちた表情のカノンは、麗一に告げた。

「……………それは、私がアヴソリユートの、一部だから……………です……………」

「え？……………どういう、事？」

「……………私は、Dシステムを発動させるためのカギ……………いわゆる、生体部品なんです……………」

「……………」

麗一は驚愕した。

「そのために作られて、生かされていた存在……………それが私です」
「そ、そんな……………」

「私は、麗一さんに会って最初に言っている筈です。あの台詞の意味は、そういう事です」

「あ……」

「そういえば言っていた。『自分は人間かどうかすら危うい存在』だとか、『つまりは生きたコンピューター』だとか。」

それでも、僕は――

「……僕も、最初に言ったよ。だからって、君が人間じゃないなんて、言わせないって」

「え……」

「僕は……決めた。もう、君に無茶な事をさせたくない。自分なりに頑張るよ。だから、さ……そんな事、言わないでよ、カノン……」

「れ……麗、一……さん……」

麗一の名を告げるカノンの瞳から、大粒の涙が零れ落ちる。それから、ぷつぷつと何かが切れたかのように、彼女は目を瞑り、ぐでつとした。

気絶したのかと麗一は不安になったが、そうではなかった。単に疲れただけだったのか、すやすやとカノンは寝息を立て始めた。そんな姿を見ていると、こちらまで眠たくなってきた。自分も、かなりの疲労が溜まっているのだろう。

だが、路上で寝る訳にはいかない。麗一は、気力を振り絞って歩く事にした。幸いな事に、麗一の家はすぐそこだ。

麗一はカノンを抱えたまま、器用にドアを開けて家へと入った。

……そう言えば、初めて会った時もこんな感じだったな。

麗一は思い返してみる。

そとで雨に打たれ、濡れていたカノンをソファに寝かし、起きたカノンと少し喋って、そして――

「……！！」

はっ、とした麗一は、回想を止めた。だが時既に遅く、麗一の顔は真っ赤に染まっていた。

――そうか、キス、したのか。

麗一は自覚する。

「こんな、小さくて、幼くて、そして綺麗な娘と。僕が。」

そう思いつつ、自分の抱いているその娘を見る。幼いながらも美しく整った顔。一定間おきに聞こえる寝息が妙に艶めかしい。

「う……………」

数秒ほど、麗一は生々しい想像をした。この初めてキスしたまだ幼い相手と、甘い言葉を交わし、身体に触れ、唇を重ね、舌を絡め、指を絡め、肌を重ね、そして――

「……………いかん！危ない危ない危ない！」

「おかしい。」

今の僕はどうかしている。

疲れすぎたのだろうか。

きつとそうだろう。

麗一はそう強引に解釈した。

無心の境地に達した麗一は、そのまま何も考える事無くリビングのソファへ彼女を横たわらせ、毛布を掛けた。

自分の部屋のベッドになんか連れて行ったら、またあの変な想像をしてしまいそうだから……………おつといけない。

また何かしら考えそうになった麗一は、ぶんぶんと首を振って、また無心の境地へと戻っていく。

「……………あ、そうだ。恋歌に帰って来たよって言わなきゃ……………」

戦場に赴く際、「絶対に死ぬな」と言葉を掛けた恋歌。その恋歌にだけは、声を掛けておかなきゃ。麗一はそう思っていた。

疲れた体に鞭を打ち、麗一は家を出て洋菓子店へと歩く。裏口から店へと上がり、逢坂家のリビングへと行く。

「誰もない。」

2階か。そう思つて、麗一は、上へあがった。

「恋歌？いるかい？」

「ふええ！？れ、麗一ィ！？」

「……………うん」

恋歌の部屋のドアを開けつつ、麗一は答える。

「え〜っと、ど、どうしたの……………」

「うん……………」

いまいち思考がまとまらない。どうやら、疲労がピークのようなのだ。

あ、マズイ――

「……………恋歌……………ただい、ま……………」

「へ？う、うわああああ！！麗一イイイ！！」

帰宅を告げた後、ドサツ、と力無く倒れた麗一を目の当たりにして、恋歌は叫び声をあげた。

「……………うう、う、ん……………」

麗一は目を覚ました。

ここはどこだろう。辺りを確認する。

床の至る所にはゴミが散乱、本棚には漫画が満載、まず勉強してないと一瞥しただけで分かる机。

うん。麗一は解答を見つけ出した。

考えるまでも無い。

ここは、恋歌の部屋だ。

「……………少しは片付けようよ……………」

部屋を出る間際、呆れたように麗一は言った。

そして、下の階へと降りる。

「…………………………」

リビングにあるテーブルの上を見て、麗一は絶句した。

そこにあったのは、『先に夕飯食べちゃった。てへっ？』という置き手紙（こんなのを書くのは姉さんぐらいだ）と、綺麗に食べられていたインスタントラーメンが、何故か4つ置いてあった。

カノンはこの家にはいない筈……………。

「……………って事は、あの人たち、1人で2つ食べたのか……………？」

しかも、後片付けもしないまま。

「……あのねえ」

現在、午後11時半。先に夕飯を食べた2人の気持ちもわかる。僕も飯を待てとまでは言わない、だけど、だけどさ。

「自分たちで食べたんなら、後片付けぐらいやってくれないんじやないかな……？」

そう呟きつつ、麗一はゴミ箱へ空のカップ麺を捨てた。

「はあ……」

盛大な溜息。

「全くもう……恋歌く、姉さくん？」

麗一は、2人を呼んだ。後片付けくらいしてよ、と麗一は説教をするつもりでいた。

「……………」

返事が無い。

これはおかしい。麗一は不審に思った。

姉さんともかく、恋歌はどこへ……？

麗一は2階に上がる。

「全く、どこへ行ったのさ……」

まずは、恋歌の部屋。

「……………」

いつもなら、ダラリとした様子で寝ているのだが、姿が見受けられない。

「こんな時間に、どこへ……？」

そう思い、優歌の部屋を覗いた。

「2人ともく、いる？」

麗一はそこまで言って、はっと口を噤んだ。

優歌と恋歌が2人、肩を寄せて寝ていた。

その光景に、麗一の頭脳から『説教をする』という当初の目的は欠落した。

そして、それを埋め尽くすかのような、暖かい気持ちで心を満たす。

それほどまでに、微笑ましい光景だったのだ。

「……お説教は、また今度だね……」

麗一はそう呟くと、彼女らを起きないように、そっと扉を閉めた。

自分の家に戻ってきた麗一は、カノンの元へと急いだ。

ソファに近づくと、案の定カノンは寝ていた。起きる気配は微塵も無い。

「……取り敢えず、運ぶか……」

麗一は、疲れ切った体に鞭を打って、カノンを2階のベッドへ連れて行くこうと担ぎ上げた。

「うおわっ……」

寝ているがために、力が身体に入っていないからだろうか。路上から家まで運んだ時よりかは、重たく感じた。

落とさないようにそっと、彼女を運び上げた。

横たわらせ、毛布を駆けてやって、麗一は部屋を出た。

「はあ……」

疲れていると言つのに、自分は何をやっているのだろう。麗一は自問する。

麗一はスーパーから家へと帰る途中だった。特売をやっている事を思い出した麗一は、今日を逃してはならない、という衝動に駆られ、近くのスーパーを訪れた。

目当ての大半（主に高級肉）は売り切れていたが、それでも残った物をなんとかかき集め、店を出たのだ。

「はあ……」

またも溜息を吐く。

……つい数時間前に、人を殺したとは思えないよ。

信じていた筈のカノンの話を、どこかフィルターを通して見ていた自分に、麗一は気が付く。余りに現実味が無いのだ。

ふと、麗一は自身の右手を見た。

そこには、何も無い。スーパーの買い物袋も左手に持っている
で、当たり前の事だった。

だが、この手には、先の戦闘で握っていた物があった。

「……………この手で、引き金を引いたのか」

アンチ・マター・カノン

大出力反物質砲を発射する際のトリガー。それを引いた時のグリ
ップの感触が、今も残っていた。

「……………」

これ以上の構想に嫌気がさした麗一は、首をぶんぶんと振った後、
その手を額に押し当て、目を閉じた。

……………これ以上考えても、仕方が無いというのに。

「失礼……………」

ふと、声が聞こえた、麗一は顔を上げる。

そこには、黒い衣服に身を包み、フードを浅くかぶった男が立っ
ていた。麗一は「何でしょうか」と言った後、訝しげな様子で男を
観察する。これ以上の無い警戒心の表し方だ。

男の方はそれに気づいたのか、まるで、ドラマでよくある銃を突
き付けられた時の反応のように、両手を上げて、口端を吊り上げて
見せる。そして、言った。

「おやおや、警戒させてしまったか、御咲麗一君。そう怖がらなく
てもいい。私は君に何かをする気はない」

いや、警戒するなという方が無理だろう！

麗一は胸中でツッコミを入れる。

……………というか、この男、僕の名前を知ってる。

僕が会った事は無いのに。これはおかしい。

麗一は警戒を解く事は無かった。

「……………そうか、君が……………」

男はそう呟いたが、それ以上言葉を紡ぐ事は無かった。なので、
逆に麗一が聞いてしまった。

「……………あの、何でしょうか？」

「……………おお、そうだ。まだ本題に入っていないかった」

男はそういうと、手に持っていた袋を掲げてみせる。そこにプリントされていた文字は、麗一もよく知っている物だった。

「洋菓子店『rainbow』……」

「そう。君の家族と呼べるべき人が住んでいる家なのだろう？その物を買ってね……。良ければ、君からあそこの店主に宜しくと伝えておいてくれるだろうか」

「は、はあ……」

何だろ、警戒している自分が馬鹿らしく思えてきた。

とにもかくにも、この男は危害を加えそうにない。麗一は警戒を解いた。

「……さて」

そこで、男の表情がキツと鋭くなる。

「……君には、護りたいものがあるかな？」

「……え？」

「無いのかね？」

「あ、いえ……」

無い訳では無い。麗一はそう言いたかった。だが、それが非常に曖昧なものであるのは、麗一自身が分かっていた。

口に出すべき物では無いだろう。麗一は沈黙を守る。

「……私にはある。……いや、あった、と言った方が正しいな」

「……」

この男は、何が言いたいのだろうか。麗一にはいまいち分からなかった。

「……君も、人生を生きる過程において見つける日が来る。その時は……それを守るんだ。……例え、世界を敵にしても、ね」

「……」

麗一は、黙って話を聞いていた。

「しかしながら、それを失う時もある。……だが、護りたいものというのはいつかまた見つかる。その時はいずれ来る」

「……」

熱弁を振るう男。なぜ、自分がこうも話にのめり込んでいるのか、麗一には解からない。

「……実はね、私も最近、またできたのさ。護りたいものがね」
「……………」

そこで麗一は、初めて驚愕を覚えた。なぜ共感しているのか。やはり、麗一には解からなかった。

「当然、私はそれを守りたい。が、そのものは今は神聖な場所にあつてね、私の守護は必要としないらしい……ならば、私は全てが終わってから、そのものを迎えに上がるさ」

「……そう、ですか……」

麗一はやつと声を発した。

「……君とは、もしかしたらまた逢うかも知れないな」

「……奇遇ですね。僕もそう思います」

「はは……そうか、ならば、君に私の名前を覚えておくよ」

男は、一呼吸置いてから、名を告げた。

「私の名前は……ゼロン、だ」

男の口から出た名前に、麗一はなぜか脳内にクエスチョンマークを浮かべた。

直感的に麗一は、この男と自分とは、なにかの関係がある、と思ったのだ。

「それではな、御咲麗一君。……また会えるならば、その日まで」

「はい。……さようなら」

不思議な感情を抱きつつ、麗一は帰宅した。

途端に、どつと疲れがあふれ出す。冷蔵庫に買った品物を収めて、麗一は心からの眩きを漏らす。

「……お風呂に入ろう」

麗一は、ひとまず入浴をすることにした。

ちやぷん、と、閉め切った部屋に水の落ちる音がこだまする。

「……はあ」

麗一は溜息を吐き出した。

昨日今日と、いろいろあったなあ。1つ1つ思い出してみる。まず、カノンと会った。

いろいろあって、結局ロボットに乗って戦った。

……アランシアさん、助けられなくて、ごめんなさい。

それで、あの不思議な男の人——ゼロンさん。

結局、何だったのだろうか。麗一は疑問を募らせる。

が、それを振り払い、麗一はまたも考え始める。

カノンがやってきて、新たな同居人が増えた。これは良い事だと思っ。

だけど、その代償が、小笠原諸島の消滅。そして、僕の日常の崩

壊

「……………」

麗一は、一昨日まで流れていた『日常』を思い出す。

恋歌がいて、姉さんがいて、有無がいて、瑠璃さんがいて——

……果たして、今まで通りに過ごせるのだろうか？

いつやって来るかも分からない敵に備えながら。

「……難しく考えすぎかな？」

麗一は1人呟いた。狭い浴槽の中で、言った言葉が反響する。

……取り敢えず、今はカノンに付いて行くしかない。

全てが終われば、日常は戻って来るのか？

それは分からない。

だけれども、それで僕の生きていた証が見つけれられるのなら。

「……やるしかない」

麗一は、1人拳を握りしめた。

漆黒の空間に浮かんでいる、大きな船のような物体。

その上に、光の波と共に1人の男が現れた。

長身のその男は、黒いぶかっとした服に身を包んでいて、それが

様になっていた。

その男の手の上には、四角い箱があった。見た感じ、お菓子の箱の様だ。

「ただいま帰った……」

黒い男は、カードキーのような黒いカードを機械に掛ける。すると、男を遮っていたドアが開く。

ぷしゅう、と空気の抜けるような独特の音がして開いたそのドアを、男はくぐった。

その瞬間、近くに何人かの人が寄ってくる。

「おかえりなさいませ」

「おかえりなさい」

「……おかえり」

「おかえり！」

「お、おかえり、なさい……」

「おかえりなさい！」

そこにいる全部で6人の人は、全てが女性だった。それぞれがバラバラに返事を返したが、中には声を揃える2人組もいた。

「……おや、アランシアの姿が見えないけど……？」

「……あ……」

男の一言に、全員の声が八毛る。そこから、皆黙り込んだ。

「……まさか、アランシアは……」

男が、沈黙を破ってポツリと呟いた。

「……機体が戻っていませんから、恐らく……」

紫の髪を持った、この女性たちの長かと思われる人物は、男に向かって言った。

「……またも、静かになってしまふ。」

「……そうか」

「……またしても沈黙を破った男は、間を置いてこう言った。」

「……哀しみを穿り返すようなマネをしてすまない。それより実はケーキを買って来たんだがな、このままだと1人分余ってしまふな」

なんとか話題を変えようとする男。その男の意図を汲み取ってか、紫髪の女性は、手を叩いて皆に呼びかけた。

「け、ケーキとは、それはまた美味しそうですね。……さあ、皆、テーブルの用意をしましょうか！」

「あ、はい！」

「わ、私、イスをお出ししますね……」

がやがやと、女性たちは椅子やテーブルを取り出す。あつという間に家庭によくある

家族皆の集まり、と言つのができあがった。

もつとも、1人は死んだのだが。

「……ケーキは切り分けてあるから、皆で食べてくれ……」

「あれ、いらなんですか？」

「……ああ。皆で食べていてくれ。……仲良くな」

「わかつておりますわ。さあ、座って食べましょう」

「はい！」

「……了解」

「いただきまーす！」

6人の女性たちは、ちまりちまりとケーキを食べ始める。それを見た男は、1人、部屋を出て行った。

廊下を歩いて行き、エレベーターの前に立った男は、最下部へと通ずるボタンを押した。そのあと、カードキーを再び取り出し、読み込ませる。

程なくして登場許可が下り、エレベーターへの扉が開いた。

男はエレベーターに乗り込んだ。扉が閉じて動き出す。

体が下へ落ちる妙な感覚を感じながら、見える景色を眺めた。

男の眼下には、それぞれカラーリングが違う機体が6つ、置いてある。

本来は、ここに7つ並ぶ筈だった。

「……すまない、アラংশア……」

男は、本当に申し訳なさそうに呟いた。それと同時にエレベータ

ーが止まり、扉が開く。

男は、エレベーターから出て、真っ直ぐ歩き、その最奥にある部屋の前まで行くと、扉の電子ロックにパスワードを打ち込み、カードキーを読み込ませた。

ずずず、と重たげな音を立てながら、扉が開く。

そこにあつたのは、巨大なシリンダー。

シリンダーは、薄く朱に染まっている液体で満たされていた。その中に――

女性が1人、浸けられている。

生まれたままの姿の女性は、眠っているように、目を固く閉じている。男は、軽くシリンダーのガラスに手を触れた。

「これで、9人目か……」

そのシリンダーに浸けられている女性をまじまじと眺めながら、男は呟く。

「……カノン……」

男は、寂しげに俯いた。

その男を見上げるかのように、黒い巨人が、もとい、真っ黒なカラーリングをしている機体が、そこにあつた。男は、それを見つめ直す。

「……アヴソリユートが失われた今、これを完成させねば……」

男はそう言くと、キーボードに手を伸ばし、打ち込み始める。

かたかたとキーボードを叩く音が室内に響いた。

日付が変わっていても、男は休む事無くキーボードを打ち続けた。

世界は、今まさに朝を迎えていた。

ジリリリリリリリリリリ……

目覚まし時計の音が耳に届く。

「……ふうああああ……あふ」

体の関節を鳴らした後、麗一はアラームの機能を切った。

「……6時半、か」

いつも通り。麗一はそう思い、横を見る。

目線の先には、カノンがまだすうすうと寝息を立てて寝ていた。

「……ふふっ」

麗一は微笑むと、顔を洗うため下へと降りて行った。

「姉さん、起きて下さいよ」

苦労人、御咲麗一。今日も彼は保護者代理人を起こしにかかる。

だが、いつもとは少し勝手が違った。

いつも優歌はテーブルに突っ伏して寝ている筈なのに、今日に限って布団に入って寝ているのだ。それも、恋歌と共に。

昨日は微笑ましい事この上なかったが、いつもと勝手が違うのか、なかなか起きない。

「……恋歌から起こそうかな……」

麗一は、目標を変更。恋歌を起こしにかかった。

「それにしても、2人とも寝相が悪いな……」

性格は全然違うけど、やっぱり姉妹なんだな……。麗一はつくづくそう思った。

「……んんん」

「あ、起きた」

「……何よお、麗一……あれ？ここって……」

「そつだよ、姉さんの部屋だよ」

「むにゃあああ！？」

「うえっ!？」

麗一が現在地を恋歌に言ったところ、恋歌は奇声をあげてよろめいた。

「どうしたのさ?」

「いや、姉さんと一緒に寝るなんて、やっぱり恥ずかし……」

「……んん、ふわああ……恋歌ちゃん、どうしたのお……?うる

さい……」

恋歌の叫び声で、優歌が起きた。恋歌は申し訳無さそうにしているが、麗一にとってみれば、起す手間が省けたので、これほど良い展開は無い。

「姉さん、丁度良かった。早く起きて下さい。今日は布団を干しますから」

「……んむ……まだ眠たい……」

「お姉ちゃん、寝ちゃダメえ……ぐう」

「……2人とも、ちゃんと起きて！」

まるでコントでもしているかのようにじゃれあっている2人を、

麗一は洗面台まで搬送。顔を洗わせた。

「ばしゃばしゃと水が荒々しく跳ねる音が響く。」

「……んぶはああっ！お姉ちゃん、目が醒めました！」

「早く顔を拭いてください」

高々と覚醒を宣言した優歌に向かって、麗一は言う。

「……うんにゃ……後ろが悶えてるんだから、早、く……ぐう」

「恋歌、寝ちゃダメだよ！」

全くもつ……。麗一は溜息を吐いた。

しかし、この雰囲気麗一は懐かしく思っていた。

この家族同然の2人と織りなされる慌ただしい日々。それを麗一は、まるで自分が捨てた日常の欠片のように思えた。

そして――

「……麗一さん」

カノンが、歩いて来る。

この少女が、僕の捨てたものの代わりに得た物。

そう思うと、麗一は、この少女を大切にしようと思った。自分が捨てたもの――かけがえのない『日常』と、同じくらいに。

「……麗一さん？」

「え？あ、何かな？」

「……お腹が空きました」

「あ、そう。じゃあ、今すぐ朝食にしようか。……ほら、姉さん、恋歌、ご飯食べますよ?」

「はいはい、ごはんごはんーん!」

「姉さん、廊下は走らないで下さい!」

「お姉ちゃん、はしたないよお」

そう言いつつ皆が食卓に着く。

「はいじゃあ、麗ちゃん、号令!」

「はいはい。いただきます」

僕の号令で、皆が食べ始める。

いつもは、3人だった。

けれども、今は4人。僕の日常の代償として、ここに住まう事となった少女、カノン。

そして、この4人で、新たな生活、ひいては、『新たな日常』を紡いでいくんだ。

窓から暖かい日差しが降り注ぐ。

まだ今日という日は始まったばかり。今日も麗一の忙しい日々が始まるのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6892y/>

the prism

2011年11月21日03時20分発行